隠してゐたのでござりまする。』と、具さに、事の次第を物語つた。一豐は、喜ぶこと限りなく、厚く、岳父の恩を謝して、望み通り、その馬を買ひ取つた。

間もなく、京都に馬揃へがあつた。一豐の馬は、果然、主人信長の眼に留つた信長は、委細を聞いて、益す、感心した。

『弓箭執る身の嗜みには、これに過ぎたる事はない。』と賞め、一豐の祿五百石を增して、一千石とした。一豐が、重く用ひられるやうになつたのは、この時に始まるといふ。

これ、所謂る、妻の內助なるものである。世の妻には、內助よりも、內妨が多い。內助を不足として、外助と出かけ、却つて、外妨に終る妻もある。

□根も幹も枝も殘らず朽ち果てし
楠のかほりの高くあるかな。

乃木希典

五の八　林檎の味ひ

◇一斑を見て、全豹を知る。「支那俚諺」

或る、主人、杢助にいひつけて、林檎を買ひにやつた。杢助は、畏まつて、菓樹園へ行くと、

『林檎が欲しい。旨いかね？　不味いかね？』

『手前共の林檎に、不味いのはありません。何れでもいい、一つ、喰つて御覽なさい。』

『百程、欲しいのた。一つ位る、喰つて見たとて、百の味が、判るものか。』といつて、全部、一つづゝ、喰ひ歩いては、嘗め試みて、

『これなら大丈夫！　旦那も、喜ぶだらう。』と、代價を拂ひ、籠に入れて、持ち歸つた。

すると、意外！　主人は、
『何だ？　この林檎は、どれにも、これにも、歯の痕があるぢやないか。』と咎める。
『はい、一々、喰い缺いて見た上で、いゝのを買つて來ましたからね。』
『馬鹿ツ！　貴樣の食ひさしが、何う、俺に食へるかい？』と呶鳴りつけ、その儘、捨てさせてしまつた。

× × ×

「一斑を見て、全豹を知る。」一事を押して、萬事を了る。原因があれば、結果がある、といふことは、誰れも、知つてゐる。すべての場合に試して見て、然る後ち、知るのではない。ヒユームの習慣說が是か、カントの先天說が非かは、姑く措いて、我々が、因果の法則を認めて、必然的、普遍的に妥當なるものとするのは、一斑から全豹へ、一事から萬事への推度の意である。窮理といふ、畢竟、斯うした推度の結果に外ならぬ。學問といひ、推度もよい。推料もよい。たゞ、例外といふものがある。魚は、水中のもの

定まつてゐて、事の不可能を譬へるにも、木に偷つて、魚を求むるが若し。「孟子」といふ。けれど、或る熱帶國には、木に登る魚もあるとか。萬事を推せば、大概、中らない。殊に、人の善惡を評するのに、一事を以て、萬事を推せば、大概、中らない。如何なる善人にも、多少の惡事はあらう。その惡事の故に、すべての行爲、皆、惡であると見たら、如何？　如何なる惡人にも、時には、善事もあらう。その善事を理由に、一切の所行、皆、善であると見たら、如何？　到底、輕斷たるを免れないであらう。

輕斷は、人を知る所以ではない。人を評するの際、愼しまなければならぬ。

□なが れ行く　わが身水屑と　なりぬとも
　君しがらみと　なりてとゞめよ。

菅原道眞

五の九　何ぞ畏んや

◇大人に說くには、これを藐んず。「孟子」

「大人に說くに、則はち、これを藐んず。その巍々然たるを視ること勿れ。堂の高さ數仞、榱題數尺なるは、我れ、志を得るとも、せざるなり。食前方丈、侍妾數百人なるは、我れ、志を得るとも、せざるなり。般樂して酒を飲み、駟驅田獵して、後車千乘なるは、我れ、志を得るとも、せざるなり。彼れに在る者は、皆、我れのせざる所なり。我れに在る者は、皆、古への制なり。吾れ、何ぞ、彼れを畏れんや。」（孟子）

× × ×

これ等の語、以て、孟子の氣象を見るに足る。彼れは、決して、顯貴に屈しなかつた。自ら任ずる所、天下の師たるに在つて、その諸侯伯を視るや、無智の小

兒の如くであつた。我れに在る仁義の古制が、何ものに勝つて貴いものであることを確信した孟子の爲めには、富貴、人爵の如き、物の數ではなかつた。これ、自尊の極である。顯貴を藐んずといひ、「吾れ、何ぞ、彼れを畏れんや。」といふが如き、何等の自尊ぞ！

これ、今のおべつか學者、乞食學者の能く學ぶ所ではない。

が、特に、顯貴を藐んずるのは、顯貴を忘れるに如かず。特に、自ら尊ぶのは彼我の尊卑に無心なるに如かぬ。無我の人は、一切の大我の內に包容して、他人の事にも、無心である。自分の事にも、無心である。楊氏曰く、

孟子のこの章、已れの長を以て、人の短に方ぶ。猶ほ、これ等の氣象あり。

孔子に在りては、則はち、これなし。

と。適評としなければならぬ。

六の一〇　僧丈草家を出づ

◇物持てば、持つに使はれ、持たざれば、持たざるに又た、使はる、人。

「愚佛」

僧丈草、俗姓内藤、尾州犬山の重臣である。幼より、學を好んで、和漢を究めた。繼母に仕へて、孝行の名あり、その産む所の弟に、家を譲らん爲め、故意と右の指を傷つけ、

『刀の柄が握れませんから……』といつて、仕へを辭し、剃髪して、禪に歸したその時の口號に、

多年負レ屋一蝸牛。　化做二蛞蝓一得自由。
火宅最惶涎沫盡。　偶尋二法雨一入林丘。

（多年、屋を負ふ、一蝸牛。化して蛞蝓と做りて、自由を得たり。火宅最も惶る、涎沫の盡きんことを。偶ま、法雨を尋ねて、林丘に入る。）

又た、句があつた。

涼風に、消ゆるを雲の、やどりかな。

何時の頃からか、蕉門に遊んで、俳諧を善くした。難波で、芭蕉の病床に侍つた時、門人等、それぞれ、句のあつた中に、

うつくまる、藥鑵の下の、寒さかな。

といふ丈草の詠のみ、芭蕉の感に入つて、

『丈草、出來た！』との聲がかゝつた。

元祿十七年二月二十四日、江州粟津龍ケ丘なる、その佛幻庵に寂した。年、四十二といふ。

×　×　×

「多年、屋を負ふ、一蝸牛、化して蛞蝓と做りて、自由を得たり。」——凡そ、持つ所があれば、必らず、苦しむ所がある。物を持つのは、苦を持つのである。家を持てば、家に苦しむ。妻子を持てば、妻子に苦しむ。金を持てば、金に苦しむ

道具を持てば、道具に苦しむ。

といつて、持たなければ、持たないで、亦た樂しむ。

但だ、それ、持つても、持たない如くに持ち、持たない者は、持つても樂しみ、持たないでも樂しむ。如何せんや、これ、超世脫俗人の事、我々凡人の及ぶ所ではない。願はくば、修養の功を積んで、この境地に達し、長からむ一生涯を、常極樂で送らんことを。

五の一一　佐々成政雪を詠ず

◇何事も、かはりはてたる、世の中を、知らでや雪の、白う降るらむ。

「佐々成政」

佐々成政は、織田信長に仕へて、大剛の名があつた。本能寺の變後、豐臣秀吉と隙あり、その所領を奪はれると、左右百餘人を率ゐて、越中を去るべく、道を

更々越に取り、雪の一夜を、山間の一茅舍に明した。時に、歌があつた。

何事も、かはりはてたる、世の中を、知らでや雪の、白う降るらむ。

流石に、世を恨んだ心持ちが見える。

× × ×

自然は、常に清い。そして、人間は、年々に腐つて行く。腐つた中から、草木は、芽を出し、花を開く。當分、腐り放題にして置くもよからう。失望するには及ばない。

五の一二　慌てた手紙

◇慌てる蟹は、穴へ得入らぬ。「日本俚諺」

慌て者が、友人へ手紙を書いた。その文句に、先刻は、お邪魔致し候。その節お宅の玄關へ、杖を忘れ置き候。お手數ながら、お取調の上、この者へお渡し下

され度、右、願ひ上げ候。

と書いて、封をしやうとすると、細君が來て、

『貴方、杖は、あるぢやありませんか。』

『どこに？……』

『これでせう？』

『それだ、それだ。』といひながら、右の手紙の追て書きに、

前記の杖、只今、發見致たし候間、最早、お取調には及び申さず候。

と書き足して、

『おい、これを持たせてやりな。』

× × ×

急に處理しなければならない事變、例へば、地震、火事、洪水、海嘯などに出遇ふと、大概、慌てゝしまふ。慌てゝする事は、必らず、失敗に終る。慌てるのは、宜しくないが、夜中、隣家の火事と知つて、慌てない者は、先づあるまい。何とか、慌てない工夫はないか。平生、變事に處するの用意があれば、然迄、

慌てずに濟むであらう。無常の世の中、何時、何事が起らうも知れぬ。

年を經て、浮世の橋を見返れば、さても危く、渡りけるかな。「古歌」

人の生涯は、まことに、危い橋渡りである。何時、落ちるかも知れぬ。浮嚢の用意があれば、落ちても、平氣なものである。船の用意があれば、浮世の橋を、鼻唄で渡ることも出來る。地震が、物かは？　火事が、物かは？　乃至、海嘯か、物かは？　此方に用意のある限り、先づ以て、慌てずに濟まう。

所謂る用意は、心の用意である。屋根の下にゐる者が、地震に潰され、乃至、海嘯に浚はれるのは、珍らしくない。珍らしくない事を、珍らしくない事として、平素——二六時中、絶えず、心待ちに待ち受ける。待ち受けずして出遇へばこそ、驚きもする、待ち受けて出遇ふのなら、如何なる大事も、驚くに足らぬ。況して、慌てなどはしない。

卽はち、時々刻々に、地震を待つ。火事を待つ。洪水を待つ。海嘯を待つ。一括して、變事を待つ。これ、事變に出遇うて、慌てない工夫である。

五の一三　山中にも樂みあり

◇巍々乎たり、舜、禹の、天下を有ちて、與からざること。「孔子」

「昔し、國王あり。國を棄てゝ、沙門と作り、山中に於て精思す。草茅を屋と爲し、蓬藁を席と爲して、自ら、志を得たりとし、大笑して曰く、快なるかな。邊の道人、問ひて曰く、今、山中に獨座して、道を學ぶ。將た、何の樂みかあると。沙門言く、我れ、玉たりし時、憂ひ念ふ所多し。或ひは、隣王の我が國を奪はんことを恐れ、或ひは、人の我が財物を劫かし取らんことを恐れ、或ひは、人の爲めに貪り利せられんことを恐れ、又た、常に、臣下の我が財寶を利して、反逆、時なからんことを、恐る。今や、我れ、沙門と作りて、人の我れを貪り利する者なし。快〳〵いふべからず。是の故に、快といふのみ。」（雜譬喩經）

× × × ×

物を持つのは、苦を持つのである。大きく持てば、大きく苦しみ、小さく持てば、小さく苦しむ。國王として、一國を持つ者の苦勞は、酵餘、茅屋に仰臥して天井裏の雲の峰に嘯く貧乏人の知らない所である。山中の樂みこそ、げに、「快なるかな。」

が、物を苦しむのは、物に囚はれるからである。大きく持つのは、物に束縛されるからである。物に束縛されるのは、主觀的にいつて、物に執着するのである。客觀的にいつて、物に束縛されるのである。物に執着する所から、物に役せられて、物が苦となり、物を持つこと、やがて、苦を持つことになる。執着を斷じ去つて、復た、苦はない。山中にも樂しみ王宮にも樂しむ。況んや、九尺二間の裏店住居をや、である。

昔の聖王、舜や禹は、「天下を有つて、與からず。」――その持つ所の天下に執着せず、無關心でゐたといふ。これならばよい。

因つて思ふに、區々の財産。衣類、諸道具に執着する一般の了簡は、餘りに小さい。天下にさへ、執着しなかつた人がある。三萬、五萬の財産が、何の、物の數であらう？

五の一四　尊徳善く教ふ

◇良藥は、口に苦くして、病ひに利あり。忠言は、耳に逆うて、行ひに利あり

「孔子」

二宮尊徳が、野州櫻町の陣屋にゐた頃、出入の疊職人に、源吉といふがあつた。口も利けば、才もあり、素より、分別暁漢ではなかつたが、酒が好きで、遊惰を事とし、年中、貧乏してゐた。或る年の暮、最早、正月に間のない或る日尊徳の許へ、餅の米を借りに來ると、尊徳は、

『お前のやうに、毎日、家業を怠つて、錢さへあれば、酒を飲む者が、正月ぢやからといつて、人並に、餅を食はうとは、考へが、太過ぎる。正月は、不意に來るものではない。米は、偶然に得られるものではない。春、耕し、夏、耘り秋、苅つて、初めて、米になる。お前は、耕しも、耘りも、苅りもせぬ、米のない

いは、當然ぢや。今、貸してやつたとて、何うして返すか。借りて返す道がなければ、罪人になるのぢやぞ。正月、餅が食ひたかつたら、今日から、酒を止め遊惰を改めるがよい。この正月は、餅を食はずに、過ちを悔いよ。』と說諭した。

源吉は、大に悟つて、

『成程、心得違ひでございました。仰せの通り、この正月は、餅を食はずに、過ちを悔いませう。』と誓ひ、悄然として、辭し去つた。その後ろ姿を見送りながら門人の口吟んだ狂歌に、

言行（源公）が、一致ならねば、年の暮、疊み重なる、胸の苦しさ。

時に、尊徳は、手に金を握つてゐて、門を出やうとする源吉を呼び返して、

『俺のいふ事が解つたか。』と念を抑し、源吉が、

『眞實、肝に銘じました。生涯、忘れませぬ。今日からは、酒を止めて、勉強致します。』と答へると、

『それなら、結構ぢや。』といつて、白米一俵、餅米一俵、金一兩に、大根、芋などを添へて與へた。源吉は、深く感激して、その後は、酒も飲まず、怠らず、生

れ變つたやうになつて、一代を終つた。

× × ×

人、過ちのない者はない。悔いて、初めて、善人となる。而も、それには、先づ以て、過ちを知る必要がある。自分の事は、存外、自分に判らない。他人の忠告に依らなければならぬ。たゞ、良藥の、口に苦いと同様、忠言は、耳に逆ふが爲めに、多くは、これを聞くを欲しない。自然、いふ者も、いふことを欲しないで、過ちは過ちを重ね、匡救の時なくして終る者、世間、皆、これである。彼れの不心得は、然ることながら、此れの不親切も、亦た、甚はだ惡むべきに屬する。

忠告するのは、親切からするのであるを起させるには足る。效果は、絶無である。親切を缺く忠告は、以て、相手に反感至誠にして動かざる者は、未だ、これあらざるなり。と。これ、人情の定則である。孟子曰く、

二宮尊德は、怠け者の源吉に忠告し、意見を加へて、その過ちを改めさせた。

誠を以てしたからである。手近く、親切を以てしたからである。その親切は、一方、苦言を與へると同時に、他方、米錢を與へたことに依つて明白である。流石の源吉も、この親切には動かされた。既往の非を悔い改めた。尊德の仕方は、蓋し、忠告の法としてよい。

五の一五　白石友に讓る

◇困難に會して、眞友が判る。「シセロ」

新井白石が、その師木下順庵の推薦に依つて、加賀の前田侯に聘せられやうとした時、同門の加賀人岡島仲通、名は達、石梁と號するが、白石に向つて、

『私が、江戸へ學問に來てゐるのも、最早、何年かになり申す。この頃、故郷の母からの手紙に據ると、母も、日一日と老衰して、私の歸るのを、頸を長くして待つてゐる樣子ぢや。それを思ふと、萬感、胸に迫り、殆んど、斷腸の思ひでご

ざる。就いては、先生の御推薦を乞うて、前田家へ仕へたいと存ずる。貴方から先生へこの事を願つては下さらぬか。』といふ様子が、餘程、困つてゐるらしかつた。

白石は、非常に同情して、早速、順庵の許へ往つて、詳細、岡島の願意を述べ『私は、どこ、國を擇びませぬ。岡島の爲めには、老母のをらるゝ國で、加賀へ往きたいのも、道理でございまする。何卒、私を措いて、岡島を御推薦下されたく、私からも、切に、お願ひ申しまする。』と乞うた。順庵は、大に感動して、『人の心が、日に浮薄になつて來てゐる今の世の中に、子のやうなことをいふ者は、復たとありはせぬ。古人を今に見るとは、これ等をいふのであらう。』といつて、白石の友に敦いことを賞め、感涙を禁じ得なかつた。

岡島は、やがて、加賀へ行くことになつた。

× × ×

困窮、その極に達して、往々、米鹽にも事を缺くの際、大諸侯の聘を受ける。物に動ぜぬ白石も、幸福の感に、胸の轟くを覺えたであらう。一旦、友の哀訴に接するに及んでは、深く、これに同情し、己れの幸福を讓つて惜しまい。この俠誰れあつて、及ばんや。

某仕へ從はん事は、いづれの國をも撰ばず。彼の人は、老いたる母の候ふなる國にて侍れば、某に代へてすゝめらるゝ事、某も、また、望む所なり。けふよりしては、某を以て、彼の國にすゝめられん事、固く、辭し申す。」折たく柴」

この言、眞に、人を泣かしむるに充分である。

五の一六　木箪に怒る

◇他人の財を算ふ。「日本俚諺」

夏の田舍路を歩く男、喉が渇いて仕方がない。ふと、木箪に奇麗な水の流れてゐるのを見て、立ち寄つて、鱈腹、飲んだ末に、手を擧げて、

『おいおい、俺は、もう、充分だ。この上、水に用はないよ。』と呶鳴つたが、水は、依然として、流れて來る。大きに立腹して、

『澤山だといふのに、何だつて、おいおい、流れて來るのだい？　解らない水だぞ。』と喚き立てると、見てゐた人は、呆れた男ではある。』と、大笑ひを

『水が要らないなら、飲むことを止める迄だ。

した。

×　×　×

自分に必要な物、或ひは、關係のある事に頓着するのは、まだしもである。往々、不要な物、無關係の事に迄頓着して、心を苦しめ、思ひを勞するのは、何とした間違ひか。

他人の財を算へるのはそれである。

好き仲も、近頃疎く、なりにけり。隣りに倉の、建ちしより後ち。

隣家の繁榮を羨むのは、それである。

死んだ子の年數へ。

何としても、取り返しのつかないことを、左や右思ふのは、それである。灰になつた身上を悔むのはそれである。取越苦勞は、それである。あり餘る金を持ちながら、尙ほこの上にもと思ふのは、それである。他人に施すことが出來ないのは、それである。

生年、百に滿たず。常に、千歲の憂ひを懷く。「文選」

のは、それである。皆、自分に不要な物、若しくは、無關係の事の爲めに、心を苦しめるのである。愚としなければならぬ。

若しそれ、志士仁人が、天下の爲めに憂ひ、同胞の爲めに勞し、甚はだしけれ

ば、

身を殺して、仁を成す。「論語」

に至つては、その事、その人に無關係ではあるが、亦た、讃嘆すべきに屬し、まことに、我々の儀範である。これ、如何？　彼れと此れとは、心持ちが違ふ。

彼れは、私である。此れは、公である。

五の一七　他人の毀譽

◇人の口には、戸が立たぬ。「日本俚諺」

「我が身の行ひの善惡は、世人のほめそしりを、あながちに、常にして、喜び、懼るべからず。たゞ、道理をもて、法とすべし。わが行ひ、道理にかなはゞ、世こぞりて毀るとも、懼るべからず。我が行ひ、道理に背かば、世、擧りて譽むとも、喜ぶべからず。よき人に譽められ、あしき人に毀らるゝをこそ、君子とはいふべけれ。人ごとにほむる者は、かへりて疑はし、多くは、巧みにして、かざれる人なるべし。

わが身を修むるには、譽められんとすべからず。たゞ、過ちなからんことを思ふべし。我が身だに、道理にかなはゞ、人の毀り譽れは、さもあらばあれ、喜び憂ひとするにたらず。

但し、士の節義、武勇の道と、又た、利慾のけがれなく、廉潔にして貪らざる此の二は、なべて、人の毀らざるやうに、心がけ、つとむべし。名を惜しむも、義において害なし。此の二つの事かけなば、其の餘は、見るに足らず。」

（貝原益軒）

世人の所謂る善人とは、「好きな人」のことである。飜譯していへば、自分に餌を呉れる人、便利な人のことである。惡人とは、「嫌ひな人」のことである。何も呉れない人、不便な人のことである。私心を以てせらるゝ評價など、あてになつたものではない。他人の毀譽に拘々たるのは、眞に、愚である。

他人の毀譽に拘々として、喜び、悲しむのも、愚である。譽められて喜ぶのは、他人の奴隷となるのである。猿芝居の猿は、猿曳きの引く綱のまにまに、人に動かされ、使はれるのである。打ち揮ふ笞のまにまに、右し、左し、臥つ、起きつ、種々の藝當を演ずる。人間他人に綱を引かれて、狂舞亂踏すること、名譽ではあるまい。英國の諺に、

月は、犬の吠へるのに頓着せぬ。といふ。他人の言葉や思惑に頓着せず、高く、毀譽褒貶の表に超然として、已れの眞を守るのを、大人の態度とする。

五の一八　重治部下を諭す

◇物持たぬ、袂は輕し、夕すゞみ。「古句」

竹中重治は、元龜、天正の頃の勇將である。嘗つて、部下を諭して、『分に過ぎた價ひを出して、馬を買つてはならぬ。よい敵と見かけ、追ひ詰めて馬を下り立たうとする時、馬添ひの人が續かぬと、この馬、人の物にならう。再び得られる馬ではないと、惜しむ心が出て、つひ、時刻を失ふ。馬のよいが爲めに、却つて、名を失ふのぢや。十兩の馬を、五兩の馬で滿足すれば、惜しけもなく、飛び下りられやう。時宜次第、乘り捨ても出來やう。捨てた所で、殘りの五

兩で、復た馬を買へばよい。』

又た、

『馬に限らず、萬事、この心得があるべきぢや。武士たる者は、義の爲めには、身をさへ捨てる。財寶なぞは、尙更のことぢや。塵芥とも思はぬ心がけ、これ、武士の本意ではないか。』といつた。

× × ×

物を持てば、持つに使はれ、持たなければ、持たないに使はれる。小人の心は常に、物に執し、囚はれて、殆んど、物の奴隷である。

物に囚はれない工夫はないか。要は、工夫に在る。修養に在る。一朝夕の談ではないが、差し當り、立派な物、高價な品を持たないこと、これ、物に囚はれない工夫である。

家は、粗末な家がよい。火に燒けても、惜しげがない。衣類は、粗末な衣類がよい。蟲干しの手數がない。道具は、粗末な道具がよい。壞れても、平氣でゐられる。

『それぢや、一向、樂みがない。』といふ人には、謹しんで、一歌を呈する。

事足れば、足るに任せて、事足らず、足らで事足る、身こそ安けれ。

五の一九　清水宗治の俠死

◇壽ければ、辱ぢ多し。「莊子」

天正十年の夏、備中高松の城を水攻めの最中、本能寺の變を耳にした豊臣秀吉は、流石に、色を失ひながらも、強ひて、平氣を裝ひ、心、毛利家との和睦を決して、その使者には、安國寺惠瓊を選んだ。

惠瓊は、城將清水宗治に對面し、一死、以て、部下の命に代らんことを勸告した。秀吉の水攻め策は、着々、功を奏して、落城は、今や、目前に迫つてゐる。情けを知つた宗治は、惠瓊の言に從つて、潔よく、腹掻き切り、幾百の士卒をして、能く、その生命を全くせしめた。辭世に、

惜しまるゝ、時に散るこそ、世の中の、花も花なれ、人も人なれ。

× × ×

生存の價値は、その生存に依つて、世の爲め、人の爲め、何等か、貢獻する所がある時にのみ、認められる。人は、自分の爲めにのみ生きるものではない、又た他人の爲めである。

親が、子を愛育し、子が、親に孝養するのも、他人の爲めである。主人として一家族を養ふのも、他人の爲めである。志士の、君國に奉じ、仁人の、同胞に盡す、亦た、他人の爲めである。商人が、營利を事として、只管、生存競爭の優勝者たるべく努めるすら、それが、人類の進化を致し、社會の發達を促す原因である限り、同じく、他人の爲めにするものと見てよい。こゝに、生存の價値がある。

自然は、個人に與ふるに、自己保存の本能の外、種族保存の本能を以てした。以て、自然の意圖を窺ふことが出來る。種族は、他人である。

であるから、無爲にして生きるのは、無價値の生存である。自然に反する。自

然は、その人の生存を許さゞらんとして、間もなく、これに老衰を與へ、死を與へる。從來、內外の家事に軼掌して、活潑に、壯んに活動した人が、一旦、家督を讓り、樂隱居となり、無爲の生活に入つて、忽ち、斃けてしまふなどは、稀らしい例ではない。

人はいふ、苦勞は、人を殺すと、吾等はいふ、安樂は、人を殺すと。

果して然らば、苟くも、一息の尙ほ存する限り、人は、苦勞しなければならぬ。世の爲め、人の爲め、多少の貢獻があるべきである。こゝにのみ、生存の價値がある。

世の爲め、人の爲めに生きるのが、價値ある生存であるならば、世の爲め、人の爲めに死ぬのは、價値ある死滅であらう。世の爲め、人の爲めに生くべき人が、世の爲め、人の爲めに死すべきは、當然の歸結であらう。死と生と、その價値を等しうするものでなければならぬ。清水宗治は、一死、以て、部下數百人を救つた。その死は、猶ほ、その生の如くである。惜しむに足らぬ。悲しむに足らぬ。

五の二〇　愚人子を殺す

◇過ちて改めざる、これを過ちといふ。「孔子」

愚人、七人の子を持つてゐたが、中の一人が、急病で死ぬと、その死骸を放つて置いて、他へ引き越さうとする。驚いたのは、近所の人で、

『お前さん、何故、死骸を取りかたづけぬのぢや？　捨てゝ行かれては、近所迷惑の上に、第一、佛が可哀さうぢやないか。』といふと。

『成程！　では、葬つてやりませう。』と答へて置いて、さて、考へたには、

『同じ葬る位ゐなら、一人では物足らぬ。今一人……』といふと、達者で遊んでゐる二番目の子を、いきなり、縊め殺してしまつて、二つの死骸を、天秤棒の兩端にかけ、墓場を指して、えつちら、おつちら、擔ひ出した。

× × ×

人として、過ちのない者はない。改めるのを貴しとするが、小人は、却つて、過ちを文り、過ちを遂げ、過ちを重ねて、次第に、深身へ落ちて行く。一兒の死を見て、他兒を殺した愚人と孰れ？

伊藤仁齋曰く、

一心、以て、堯舜の道に入るべく、一心、以て、堯舜の道に入るべからざるは、能く、過ちを改むると否とに在るのみ。それ、人、過ちなきこと能はず能く改むるを貴しと爲す。過ちを改めざる、これを過ちといふ。故に、聖人の教へは、過ちなきを貴ばずして、能く改むるを貴ぶ。

と。思はなければならぬ。

五の二一　衆生の恩

◇ほろ〳〵と、鳴く山鳥の、聲聞けば、父かとぞ思ふ。母かとぞ思ふ。

「惠心僧都」

「衆生の恩とは、卽ち、無始より以來、一切衆生、五道に輪轉して、百千劫を經、多生の中に於て、互ひに、父母となる。互ひに、父母と爲るを以ての故に、一切の男子は、卽ち、是れ、慈父なり。一切の女人は、卽ち、是れ、慈母なり。若し生々の時、大恩あるが故に、猶ほ、現在の父母の恩の如く、等しとして差別なし。是くの如き昔恩、猶ほ報いず、或ひは、妄業に因りて、諸ろの違順を生ず。執着を以ての故に。反りて、其の怨みを爲す。何を以ての故に。無明宿住の智明を覆障し、前生、曾つて、父母の恩を報い、互ひに饒益を爲すべき所を了らざればなり。饒益なき者は、名けて不孝とす。是の因緣を以て、諸ろの衆生の類、一切の時に於て、亦た、大恩ありて、其の恩、實に、報い難しとす。」心地觀經」

× × ×

佛教では、前生を說く。我々の一代は、この一代のみではなく、過去久遠劫の昔から、生き代り、死に代り、一代又た一代、無量の一代を重ねて、今日の一代に及んだのである。その何れかの一代には、今日、仇敵を以て相見る者にも、或

ひは、親子であつたかも知れぬ。今日、家に飼ふ犬や猫も、或ひは、自分の兄弟自分の妻、自分の夫であつたかも知れぬ。無量の一代である。必らず、然うした一代もあつたであらう。

であるから、天地の間に、生きとし生けるもの、まんざらの他人といふはない。皆、互ひに負ふ所の恩がある。これを稱して、衆生の恩といふ。

我々は、互ひに、衆生の恩を負うてゐる。互ひに、その恩を報い合ふべきで、敵と雖も、これを愛しなければならぬ。我々の愛は、啻に、人間界のみならず、更に、禽類の仲間にも及ぶべきである。ほろほろと鳴く山鳥も、過去、何れかの一代には、我が父、我が母であつたかも知れぬ。これを虐げるのは、父を虐げるのである。これを殺すのは、母を殺すのである。不孝、これより大なるはない、といふのが、佛教の説である。

吾等は、佛教の門外漢である。前生の説は、解し得ない。たゞ、我々が、地上に於ける一切の人、一切の生物から、恩を受けてゐることは、明白、疑ひなしである。全然の他人といふはない、エマーソンの語に、

我れは世界の持主である。

とは、この事實を、別言したに外ならぬ。衆生の恩は、空想ではない。我々の愛は、宜しく、一切の人間、一切の生物に及ぶべきである。

五の二三　重治とその子の小便

◇過ちを觀て、こゝに、仁を知る。「孔子」

竹中半兵衛重治の屋敷で、軍物語の催された時、話半ばに、半兵衛の子左京が、座を起つた。半兵衛は、その歸るのを待つて、

『どこへ行つたか。』と問うた。左京は、

『はい、便所へ參りました。』何氣なく答へた。半兵衛は、忽ち、聲を勵まして、

『小便が出たくば、何故、この場でせぬか。竹中の倅が、軍の話に聞き入つて、座敷で小便を洩らしたといはれゝば、我が家の面目ぢや。武士たる者には、是非

これ程の心がけがなくては叶はぬ。』と叱りつけた。

× × ×

「過ちを觀て、仁を知る。」――仁者は、仁に於て過ち、智者は、智に於て過ち、貪慾漢は、貪慾に於て過ち、利巧者は、利巧に於て過ち、正直者は、正直に於て過ち、酒好きは、酒に於て過ち、よく泳ぐ者は、水に於て過つて水に溺れる。女好きは、女に於て過ち、人間、過つことを免れないとならば、なるべく立派なことに於て過ちたいものである。

五の二三　島の秀家

◇驛長、驚く莫れ、時の變改。一榮一落、これ春秋。「菅原道眞」

備前中納言浮田秀家は、一萬八千人の將として關ケ原に戰ひ、一敗して、伊吹山から美濃の白樫村へ落ち延び、暫時そこに隱れて、更に、薩州へと下り着き、島津氏に倚つた。その事が聞えると、將軍家康は、死一等を減じて、八丈島へ流した。

島での秀家の境界は、まことに、哀れなものであつた。苫葺く庵、竹の編戸、雨風をさへ凌ぎかねつゝ、黒木の柱を削つて、書きつけた歌に、

藻鹽燒く、うきめ苅る身は、蒲風の、とふばかりにや、佗ぶと答へん。

思ひやられる。

その後ち、備前兒島の商船が、風に放たれて、八丈島へ漂着した。秀家は、最早、九十餘りになつてゐたが、故郷の者と聞いて、いと懷かしげに、種々の物語をした。

『備前には、誰れがゐる。』

『新太郎少將がをられます。』と答へると、

『誰れの事か知ら？』と考へ。家老の名を聞いて、

『さては、池田の家ぢや。』と頷づき、

『して、城は、諸所にあるか。城の北に、伊勢の宮を建て、置いたが、何うなつ

たか。』

『伊勢の宮は、ございます。けれど、武家屋敷が、ひしと列んでをります。』

その言葉を聞いて、

『では、世が治まつたのぢや。亂世ならば、國境の城に武士共を分けて置くから岡山には、そんなにない筈ぢや。今の話で、世の治まつたことを知つた。』といひ、

我れこそは、新島守よ、隱岐の海の、荒き波風、心して吹け。

後鳥羽帝のこの御製を短冊に書いて、彼の船人に與へたとか。

× × ×

昨の諸侯、今の流人——人生の遭逢、往々、斯くの如きものがある。

三界は、皆、苦なり。國土も、何の頼みかあらん。

國土も、特むに足らぬ。諸侯も、特むに足らぬ。權勢も、特むに足らぬ。富貴も、特むに足らぬ。この無常の世に在つて、特み得るもの、あてになるものは、一つとしてありはせぬ。

であるから、富貴を求める者は、富貴に執着せずして、求むべきである。富貴を求める者は、縦し、富貴が得られなくても、失望しないその富貴が、何時々々迄も續くものとは思はない。從つて、境遇一變、貧賤に陷つても、落膽せずして、夷然としてゐる。彼れの態度は、得意、失意の時を通じて常に、平靜である。否、彼れには、失意の時といふがない。

五の二四　一頭缺けた牛

◇蟻の穴から、堤がきれる。「日本俚諺」

二百五十頭の牛を持つた男、毎日、水草のある處へ追つて行つては、養つてゐたが、或る日、大きな虎が飛び出して、勢ひ猛に躍りかゝり、その一頭を山奥へ咥へ去つた。

乃で、男が思ふには、

『既に、一頭を失つた上は、全體の數に於て、不足を生じたのだ。不足のものを飼つて置いたとて、詰ることではない。』といふので、深い坑の邊りへ驅り行き、その中へ推し落して、二百四十九頭、一頭殘さず、埋め殺してしまつた。

× × ×

全體は、部分から成る。部分を外にして、全體はない。部分の事は、往々、全體の事である。部分の缺陷が、やがて、全體の缺陷に歸することは、稀らしくない。「蟻の穴から、堤がきれる」のは、それである。人の身上にも、この例がある。人の品行には、最も、この例がある。

從來、品行方正、酒も飲まず、煙草も喫はず、女は勿論の堅人が、一日、友人に誘はれて、料理屋に遊び、酒を飲んだ。家に燻ぶつてゐるよりは、餘程、面白い。復た遊ぶ。又復遊ぶ。三度、五度、十度と、遊ぶ度の重なる程に、一廉の飲み人になる。煙草も始める。女も買ひ出す。親孝行が一變して、親を欺して金を取る不孝者となり、不正直者となり、仕事嫌ひの朝寢好きとなり、身代を棒に揮つても、遊びたいは止まず。といつて、金はなし、どゞ、惡心を起して、人の物

に目をつけ、手をかけ、大泥坊の名を天下に揚げる、といふやうなことになる。固はといへば、友人に誘はれて、たつた一度、品行の一部分を破つたに在る。

世に全德の人は少い。一得があれば、一失がある。備はらんことを一人に求めるのは、君子の戒しむる所であるが、それは、他人に對しての話、自分に對しては、十全を期して、苟くも、過ちのないやう、戰々兢々の愼しみを加へ、惡、小なるを以て、これを爲すこと勿れ。善、小なるを以て、爲さゞること勿れ。(劉備)

の心がけ、これ肝腎と知るがよい。

二百五十頭の牛、その一頭の缺けたを理由に、殘る二百四十九頭を坑埋めにした愚人の愚は、然ることながら、部分の缺陷が、全體の缺陷に歸することは、往々、斯くの如くである。

□勞力なくんば、安樂もなく、休息もなし。

カーライル

五の二五　四苦八苦の說

◇三界は、安きことなし、猶ほ、火宅の如く、衆苦、充滿せり。甚はだ惧るべし。「法華經」

人の世に於ける苦みに八種あり。曰く、生、老、病、死、恩愛別苦、所求不得苦、怨憎會苦、憂悲惱苦、之れなり。

生苦とは、人、死して、精神の趣き向ふ所を知らず、中陰にある事三七日、父母交合の時、來りて胎る。初七日は、薄き酪の如く、二七日は、酪の稠るが如く三七日は、酥の凝る如く、四七日は、肉の臠の如く、五七日は、漸く、胞胚成就し風の腹中に入るありて、其の體を吹けば、六情、初めて開く。母、一杯の熱き物を食へば、鑊れる湯に入るが如く、又た、一杯の冷き水を飲めば、寒き氷の體を切るが如し。母の身體に迫りて、痛み甚だし。月滿ちて、子の頭は、母の産門に向ふ。兩石の山を挾めるが如し。母は危ぶみ、父は怖る。生み墮して、身體、細く柔かにして、身に草の觸るゝ時は、刀劍を履むが如く、忽ち、聲を失して、大に呼ぶ。

次に、勞苦とは、父母の養育を受け、年、長大して、强健なり。然るに、漸次に考いて、頭は白く、齒は落ち、目は辨ぜず、耳は聽えず、盛りは去りて衰へ、皮は緩み、面は皺み、百節は痛み疼き、行步に苦みを極め、座するも起つも呻吟し、憂へ悲しみて、心惱み、識神、耗た滅す。

次に、病苦とは、人體は、地、水、火、風の四大、合して成る。若し、一大、調はざる時は、百一の病を生ず。四大に四百四の病あり。されば、地大、調はざれば、身體沈み、水大、調はざれば、身體膨腫し、火大、調はざれば、身體蒸熱し、風大、調はされば、身體、蜷强し、百節、苦痛を覺ゆ。故に、手足、心に任せず、氣力、虛竭して、座するにも、起つにも、人の助けを要す、口燥き、筋斷れ、鼻折れ、目見えず、耳聞えず、不淨を流出して、身は、其の上に座し、心は苦しみ惱み、言は、悲み衰へ、六親、側らに在りて、晝夜、看護して、休息せず

甘き膳、善き味ひも、口に入りて、皆苦し。

次に、死苦とは、人の死する時、四百四の病、一時に起り、四大は散り、魂魄は安からず、刀の如き風、吹き來りて、痛みを感ぜざる所なく、白き汗は流れ、兩の手は、空を摑み、風大去りて、氣息は絶え、火大去りて、身は冷ゆ。

次に、恩愛別苦とは、家内及び家外、兄弟、婦子、共に相戀ひ慕へども、一朝破れ亡ぶれば各の、自ら分離して、父は東に、子は西に、母は南に、女は北に有りて、他人の奴となり、婢となりて、相見るの時を期すべからず。

次に所求不得苦とは、財を散じて、再び求め、大官となりて貴く、又た、富まんとして、苦しみを勤め求む。縱令、之れを得るも、民のものを貪り取るなり。而も、多くは、求めて得ざるなり。

次に、怨憎會苦とは、愛欲の中に居りて、少しの事も互ひに、爭ひて、相殺害し、遂に、大なる怨みを爲り、各の、相避くとも、隱れ藏るゝ所なく、各の、刀を磨き、箭を錫ぎ、弓を張り、杖を持つ。會ま、途に逢へば、兩の刀は、互ひに向ふ。

次に、憂悲惱苦とは、人の世に在るもの、命長くして百歳なり。命短き者は、胞胎の中にて、傷き墮落す。されど、其の命長き百歳の人にても、五十年は夜に送り、五年は酒に醉ひ、又た、疾み病みて、人事を知らず、十五年は、少年にして、事を知らず、又た、年八十を過ぐる時は、老いて鈍にして智慧なく、耳は聾し、目は冥みて、法則なく、廿年を減ず。故に、餘す所は、十年のみ。其の中にも、多くは憂ひ悲しむことのみ、天下亂るれば憂ひ、天下旱れば憂ひ、大に雨れば愁ひ、大に霜れば愁ひ、穀物熟せざれば憂ひ、内外に疾病多ければ憂ひ、又た財物を失はん事を恐れ憂ひ、家人、牢獄に入りて、出期知れざれば憂ひ、兄弟、妻子、遠く行けば憂ふ。

斯くの如く、人間一生は、憂ひ、悲しみ、惱むなり。

× × ×

生、老、病、死、これを四苦とし、これに恩愛別以下の四苦を加へて、八苦とする。四苦、八苦に虐げられて、喘ぎ喘ぎ、日を送るもの、卽はち、人生の相である。

が、我々は、この儘にして、已むべきではない。否、已むに忍びない。苦界を脱して、樂地を得んことを望むのは、萬人の等しく然る所である。

何うして、苦を脱するか。

苦の因は、我々の罪業に在つて、罪業の因は、慾に在る。我々が苦しむのは、慾の爲めに苦しむのである。多くの人は、慾を自分の味方のやうに思つてゐるが實は、敵である。恐るべき敵である。慾位ゐ、我々を苦しめるものはない。

であるから、苦を脱するの道は、主として、慾を棄てるに在る。欲して、得ないと、乃ち、苦となる。得て、失ふ。乃ち、苦となる。生を欲しなければ、死も、苦ではない。苦を欲しなければ、凶も、苦ではない。利を欲しなければ、害も、苦ではない。譽を欲しなければ、毀も、苦ではない。古歌に、

樂といふ、ものを求むる、心こそ、身を苦しむる、かたきとは知れ。

といひ、安東省庵の語に、

求めなきは、これ至貴。足るを知るは、これ至富。心を安んずるは、これ至樂。

とある、相違はない。

こゝに至つて、娑婆は、却つて、淨土である。火宅は、寧ろ、極樂である。四苦もない。八苦もない。

五の二六　井伊直孝の歸國

◇たゞ儉、以て身を保つべし。「伊藤仁齋」

大坂冬の陣の時、井伊直孝の出した物見二騎が、雨に濡れて、歸つて來た。直孝は、自分の着てゐる小袖二枚を脱いで、これに與へた。さて、着るものがない。安藤帶刀の許から、小袖を貰ひ受け、縞の小袖に革袴を着けて、家康、秀忠の前へ伺候した。

直孝の領地近江の彦根は、湖上、船を泛べて、京都に近く、自然、武士の間に京都風が入り、その上、世の太平に連れて、家中の風俗が、大分、華奢になつて

來た。直孝は、ひどく心配して、
「これは、改良せにやならぬ。」と、こゝに一計を案出した。令せずして、儉約を行はせやうと、然ういふのである。
で、或る年、江戸から歸るのに、供の人數だけ、木綿衣服を用意し、彦根へ入る頃、俄かに、それと着替へさせた。
彦根の士たちは、
『殿のお歸りぢや。』といふので、美々しく着飾つて、途中迄出迎へた。見ると、供の者は、何れも、木綿衣服である。一同、これはと驚いて、自分の美服を裂きたくも思つた。
斯くて、直孝の豫期した通り、彦根の奢りは、忽ち止んだ。

× × ×

「たゞ儉、以て、身を保つべし。」——實に、身を保つに足り、以て、天下を保つに足る。
太田錦城はいつた。

儉約を勤めて、奢侈を戒しめ、勉強を主として、怠惰を戒しめ、慈惠を重んじて、殘忍を戒しめ。恭遜を守りて、鬪爭を戒しむ。この四事立ちて、人道立つ。
と。而も、儉約を忘れて、奢侈を事とすれば、勉強嫌ひの怠け者となり、慈惠を行はんにも、その資なく、却つて、貪る心も出來、行爲が、つひ、殘忍に渉るやうになる。慢心を生じて、鬪爭を好む風になる、といふわけで、四事の中、最も大切なのは、儉約である。奢侈を戒しめることである。四事は、又た、一事に歸する。

五の二七　一九　初めて蜀山人を訪ふ

◇雨降りて、地固まる。「日本俚諺」

膝栗毛で名高い十返舍一九が、初めて、蜀山人を訪ねた時の事、座敷へ通され

た限り、何時迄待つても、當の蜀山人が出て來ない、一九は、じりじりして來た腹立たしくもある。一九、元來、駿府の産で、父の職を襲いで、一小吏を勤めたが、素より、役人たるべき人物ではなし、加に、些かの酒癖の悪い嫌ひがあつて酔へば、誰れ彼れの見境ひなく、罵り散らす風だつたので、職を弟に譲り、單身、大阪へ飛び出して、淨瑠璃作者の群に入り、こゝでも面白くなくて、更に、江戸へ出たのである。今、蜀山人を訪ねると、何うやら、待ち呆けを喰はされさうである。膨れるのに不思議はない。

『馬鹿にしてる。』と呟やきながら、灰吹きを叩く煙管の音も、邪慳である。待ち待つこと、半時餘りに及んでは、最早、我慢もし切れなくなり、例の疳癪玉を破裂させて、

『おや、お歸りですか。』と驚く女中に耳も假さず、その儘、どんどん歸つてしまつた。

すると、どこか參會の席で、一九は、蜀山人と一緒になつた。床を背ろに坐つてゐるのは、蜀山人である。追々、酒の廻つた一九は、つかつかと、その前へ出

て、

『先生、お初にお目にかゝります。手前、一九です。』

『ほう、十返舍先生か、これはこれは……。』

『先生、折角、訪ねて往つた者に、待ち呆けを食はせて、逢はないなぞは、ひどいでせう。何うしたわけですか。』憤々として迫る。けれど、老成洒脫の蜀山人は笑ひながら、

『否、ひどいのは、貴公だぜ。』

『何故です？』

『何時も文なしの自分、折角、貴公が來てくれたのに、何とも、致し方がない。庭に、一本、桐の樹のあるを幸ひ、それを賣つて、大に待遇さうといふ寸法で、下駄屋へ往き、金を受け取つて歸ると、何の事だ、貴公がゐない。お蔭で、氣を揉んだ上に、桐の樹一本をふいにしちやつた。左右、若い者は、氣が早くてね え。』いひ終つて、盃を獻した。流石の一九も、

『あゝ、然うでしたか。』とばかり、恐れ入つてしまひ、爾來は、蜀山人を先生々

くゝと崇め奉り、推服して渝らなかつた。

× × ×

友人の關係は、半ば、好意の關係であつて、半ば、不平の關係である。何んな親友の間にも、必らず、多少の不平はある。不平が亢じて、或る程度を過ぎる時こゝに、友人關係は破れてしまふ。

然るに、その不平は、大部分、誤解から來る。この世は、誤解の世である。我々は、人を正解するよりも、誤解する場合が多い。人を怒るのも、怨むのも、憎むのも、大概の結果は、正解に因ることは、滅多にない。正解すれば、大概釋然として、一九同樣、「あゝ、然うでしたか」といふことになる。

であるから、輕々しく、人の言行を解釋して、不平に思ふのは、宜しくない。勉めて善意に解釋して、尙ほ、不平があつたら、相手に向つて、その事を語り、相手の眞意を確かめるがよい。いはず、語らず、胸底深く、不平を秘めてゐるのは、不快でもあり、苦痛でもあり、相手に對して、不親切でもあり、互ひの不利益でもあり、又た、女々しくもある。男子の態度は、須らく、磊々落々、日月

の皎然たるが如くでなければならぬ。

五の二八　番頭の百年目

◇上下、交も利を征りて國危し。「孟子」

横着な番頭、

『商ひに行つて來ます。』といつて、家を出ると、その儘、藝妓、雛妓を引き連れて、向島へ、花見にとしやれた。春は三月、花盛り、花の下に陣取つて、飲んで歌つて、その揚句には、目隱し遊び、番頭の由良之助が、手の鳴る方へ追ひ廻してゐると、目を開いて見て、びつくり仰天

『これはこれは……いや、お久しぶりで……』

とは知らない番頭が、勢ひ込んで捉まへて、とやらかした。

隱居は、餘りの事に、頰膨らして家へ歸り、その晩、番頭へさんざんのお叱言

があつて、

『時に、忠兵衛、毎日、鼻を突き合せてゐる俺に、「お久しぶり」とは、何うした挨拶ぢや？』と、眞顔で訊かれると、番頭は、恐縮しながら、

『はい、あんな處でお目にかゝりましたのは、手前の爲めには、眞實、百年目でございます。』

× × ×

昔の主從關係は、同情關係であつた。今の主從關係は、利害關係である。主人は、奉公人に依つて、自ら利せんとし、奉公人は、主人に依つて、自ら利せんとするもの、今の主從の心持ちである。

孟子曰く、

王は、何を以てか、我が國を利せんといひ、大夫は、何を以てか、我が家を利せんといひ、士、庶人は、何を以てか、我が身を利せんといふ。上下、交も、利を征りて、國危し……苟くも、義を後にして、利を先にすることを爲さば、奪はずんば饜かず。

以て、往いて之れを資助せよ。若し、夫れ、施す能はざらん。」（優婆塞戒經）

× × ×

人に施すことは、難かしい。難かしいのは、施す「事」が難かしいのではなくて、施す「心」になることが難かしいのである。施す心のある限り、如何なる貧者も、施すことが出來る。況して、富者に於てをや、である。彼等が、施すことをしないのは、心がないからである。「施すに意なくんば、國主と雖も、必らず、施す能はざらん——」貝原益軒も、

たゞ、志のなきを恥ぢて、財の乏しきに言を寄すべからず。

といつてゐる。富者たる者、これを恥ぢよ、これを恥ぢよ。

但し、報酬目あての施しは、眞の施しではない。名聞の爲めの施しは、眞の施しではない。今の金持ちの施し——慈善には、これの多いことを注意して置く。

と。胡麻化さずんば饗かず、遊ばずんば饗かざる、奉公人の罪か、主人の罪か何方も惡い。

五の二九　何人も施すべし

◇施すに意なくんば、國主と雖も、必らず施す能はざらん。「優婆塞戒經」

「財無き人の、自ら、財なしと說くものは、實にあらず。何となれば、人として一水一草をも有せずといふもの無ければなり。極貧の人、一食を得たる後ち、食器を洗ひ、その潘汁を施すも、福を得ん。縱令、麨塵を以て蟻に施すも、亦た、無量の福を得ん。天下の極貧と雖も、誰れか、塵許りの麨なきものあらんや。極貧の人、衣服なしと雖も、眞の赤露のものはあらじ。苟くも、衣あらば、一線を拔きて、人の瘡を繫ぎて、施しを作せ。善男子、天下の人、貧窮なりと雖も、其の身なきものはあらじ。若し、施す物なき時は、他人の施しを作すを見ば、身を

五の三〇　中島可之助の「可」

◇義は、勇に因りて行はれ、勇は、義に因つて長ず。「吉田松陰」

長曾我部元親の子を信親といふ。生れた時、織田信長を烏帽子親に乞ひ、信長の名の一字を貰つて、斯くは命じたのである。

當時、信長と元親との間には、面識がなかつた。元親は、その臣中島可之助といふを使者として、安土へ上らせた。可之助——奇妙な名である。「可」といふ字は、手紙によく使はれるが、「可相成」「可被下」など、何時も、他の字の上に立つ人も、人の上に立つのでなければならぬと、氣を負うた彼れは、斯く名乘つた。

今、勢威赫々たる信長の前へ出ても、なかなか、負けてはゐず、主人元親の武勇を賞め立て、萬丈の氣焰を揚げた。

強情我慢の信長は、片腹痛く心得て、

『四國の島の中で、纔かの武功を立てた位るが、何程の事ぞ。四國猿といふが、元親は、猿ではなくて、蝙蝠ぢや。鳥なき里の蝙蝠ぢや。』

と冷笑した。可之助は、憤然として、

『否、蝙蝠ではござりませぬ。』

『やはり猿か。』

『蓬萊島の寒天でござりまする。』と、我れにも解からないことをいつて除けた。

信長は、笑ひながら、

『よいよい！　其方は、四方に使ひして、君命を辱しめぬ男ぢや。主人元親の人物も、思ひやられる。』といつて、元親の乞ひを容し、可之助には　數々の引出物を取らせた。可之助は、得々として歸國し、主人の感賞に預かつた。

武士に貴ぶもの、一に義とし、他を勇とする。義と勇とは、實に、我が國武士道の精髓を成すもので、能く、この二つを體して、乃はち、眞の武士がある。

而も、二つは、二つであつて、又た、一つである、義があつて、勇がなければ

義も、施すに由がない。勇があつて、義がなければ、勇は、卽はち、暴である。若しくは、伸びずに終る。孟子曰く、

自ら反さずして縮くんば、千萬人と雖も、吾れ往かん。

と。これ、勇が、義によつて長ずるのである。

可之助が、四方に使ひして、君命を辱しめじとしたのは、義である。權貴に屈せずして、その義を行つたのは、勇である。氣を負うて、『可』字を名乘つたなどは、所謂る、稚氣なるものであるが、彼れ、亦た、一個の眞正武士であつたには相違ない。

五の三一　良寛上人の無慾

◇我が庵は、青天井に、土蕗、月日を明り、風を手等「手島皆虎」

越後の良寛上人は、人も知つたる名僧である。或る時、新發田侯が、禮を厚

うして、請待しやうとすると、

焚く程は、風が持て來る、五合庵。

と口吟んで、應じなかつた。五合庵は、その居の名である。

庵中、ある物とては、たゞ一つの摺鉢ばかり！　その摺鉢で、味噌も摺れば、米も研ぐ。又た、顔も洗ふ、時としては、雜巾桶にも代用して、平然としてゐた或る年、筍が、椽の下から頭を出したが、床板に閊へて、伸びられない。上人は、

『可哀さうぢや。』といつて、床板を外し、疊に穴を開けてやつた。筍は、にょきにょきと伸び出して、今度は、天井に閊へた。天井を抜く。屋根に穴を開ける。五合庵は、筍の爲めに、串刺しにされた。

× × ×

世に、眞の貧者といふはない。如何なる貧者も、持つ所がある。而も、最も偉大なる、最も貴重なるものを、最も多量に持つてゐる。太陽を持つてゐる。月を持つてゐる。大地を持つてゐる。世に、饑ゑて死ぬ者の少い所を見ると、

生き物に餌あり。「日本俚諺」

で、食物を持つてゐる。水を持つてゐる。道を行くのに、道路、橋梁を持つてゐる。見渡せば、山川湖海、花鳥風月、美しい景色を持つてゐる。これ等諸物の貴さは、金銀、什具の比ではない。これを持つ所の貧民が、何の、貧民であらう？

が、世の貧者中、己れの持ちものの、多大なことを顧みて、幸福を感ずる者はない。皆な、苦しい思ひをしてゐる。

因つて思ふに、貧者の貧者たる所以は、持ちものの少い點に在るものではなくて、己れの幸福を感ぜず、却つて、不幸を感じ、苦痛を感ずるの邊に在らう。

何故、幸福を感じ得ぬか。何故、苦痛を感ずるか。慾があるからである。我れがあるからである。小我、小慾の見る所、所謂る我が金銀、家、屋敷、田地、衣類、諸道具のみが、我がものであつて、天地萬物は、我がものではない。さては自ら目して貧者とし、不幸として、天地萬物も持つことの幸福を感じ得ないのである。

貧者のみではない。小我、小慾の小人たる限り、富者も、この幸福を感ずることは出來ぬ。

無我は、大我である。無慾は、大慾である。無我、無慾の人は、區々たる一身一家には執しないで、直ちに、天地を我れとし、萬物を我がものとする。無邊の蒼空は、我が家の天井となつて、我れを蓋ひ、大地は、蓆となつて、我れを載せ日月は、燈火となつて、我れを照らし、風は、手箒となつて、我が「焚く程のものを持て來る。」萬物、皆、奴隷となつて、我が用をする。何等の豪富！　岩崎、三井も、所詮、及ぶものではない。

若し、良寛上人を貧者の中に數へる者があるならば、それは、大間違ひの甚はだしいものである。

前にいつた、如何なる貧者も、持つ所があると。あらゆる持ちものの、最上位に立つものが、苦を樂とし、不幸を幸福とし、貧を富とし、地獄を天堂とし、娑婆を極樂とするに堪へる所の、不思議な「心」であることを附け足して置く。

◇世の憂きを、忘る、酒に、醉ひしれて、身の憂さ添ふる、人もありけり。「小澤蘆庵」

三太郎、叔父の家で、御馳走になつた。椀の物も、皿の物も、水臭くて、甚はだ不味い不平らしい樣子でゐると、叔父は、早くも、それと察して、ぽつちり、鹽を入れてくれた。味が、忽ち一變して、それこそ、頬べたが千切さうである。

乃で、三太郎は考へた。

『あればかり、鹽を入れてさへ、こんなに旨くなる。鹽ばかり食つたら、嘸、旨いことだらう。』と、そこそこに挨拶をして、家へ歸ると、納屋の俵から、鹽を大きく兩手に掴

んで、むしやり、むしやり。

所が、些とも旨くないのみか、ひどく、口や舌を損ひ、胃腸の病氣を引き起して、醫者よ、藥よと、大騷ぎをやつた。

× × ×

小人は、左右、事を過して、失敗する。酒を過して、體を壞し、房事を過して神經衰弱に罹り、慾を過して、儉約を過して、吝嗇に落ち、勉強を過して、病氣を引き出し、寢過して、高利を貸し、倫に乘り遲れ、遊び過して、家業を怠り費ひ過して、晦日に青くなり、いひ過して、喧嘩を始め、勇を過して、相手を打ち、打ち返されて、逃げ出す途端に、泥溝へ陷るなどは、餘り見よい圖ではない。

六の二　人命日々に減損す

◇寢ねざれば、夜長く、疲倦すれば、道長く、愚かなれば、生死長し。

「法句經」

一切衆生、世の樂みを貪り著して、無常を慮はざるは、之れを譬ふるに、人、廣き野にて、狂象に逐はれ、怖れ走るとき、一の空井の傍に樹根あるを見、これによりて、井の中に潛む。然るに、池の中に、一大毒龍、口を張りて上に向ひ、又た、四邊にも、四の毒蛇ありて、怖ろしさ云はん方なし。此の人、一心に樹根を捉ふと雖も、更に、黒、白、兩つの鼠ありて、其の樹根を噛む。時に、井の上に一の大樹ありて、日に一滴づつ、蜜を滴して、人の口の中に入る。然る間、此の人、たゞ、蜜をのみ憶ひて、復た、種々の衆苦を憶はず、卽ち、此の井の中より出づることを欲せざるが如し。

狂象とは、世の常なきをいひ、井とは、衆生の宅をいひ、毒龍とは、地獄をいふ。又た、四毒蛇とは、四大なり。樹根とは、人の命なり。兩つの鼠とは、晝と夜となり。人の命、日々に損減して、暫くも住まらず。是の故に、行者、當に、無常を觀じて、衆苦を離るべし。（譬喩經）

× × ×

譬へ得て、妙である。六度集經には、人命は、譬へば、牛を牽きて、市に屠るに於て、牛、一たび歩を遷せば、一歩、死地に近づくが如し。人、一日を得るは、猶ほ、牛の一歩する毎に、命の流れ去るが如し。

とある。亦た、好比喩である。

況んや、その死が、往々、寸刻の後に在るにおいてをや。油斷のなつたものではないが、小人の常、千年も、萬年も、生きるやうな顔をして、たゞ慾張り、たゞ頑張る。

やがて死ぬ、けしきも見えず、蟬の聲。（芭蕉）

といふもの、又た、人間の事である。「愚かなれば、生死長し。」——愚でなくて何であらう？

六の三　矢頭右衛門の東下

◇天下、後世迄、信仰、悦服せらるゝものは、唯だ一體の眞誠なり「西郷南洲」

矢頭長助は、一子右衛門七と共に、夙に、大石内藏助に一味し、赤穗退散の後は、大阪堂島に借家住居をして、一擧の期を待つたが、その期は、容易に來ない たゞさへ貧しい身の、浪人の坐食、三度の食にも、事を缺かうとして、圖らずも病氣に罹つた。

斯くて、愈よ臨終といふ時、右衛門七を呼んで、

『この儘死ぬのは、殘念ぢやが、天命、如何ともし難い。何卒、父の志を繼いで、本望を遂けてくれ。』と遺言して、息を引き取つた。右衛門七は、家主久兵衛

に告げ、その手で、たゞ一領の着込を典して、費用を調へ、梅田の墓地へ葬つた。

元祿十五年秋の八月の事で、右衛門七、時に十七歳であつた。

すると間もなく、江戸へ下ることになつて、忽ち、着込に差し支へた。窮餘、久兵衛を欺いて、

『過日の着込、今の中に、手入をして置きたい。暫時、借りては下さらぬか、何直ぐ返します。ほんの暫らくで宜しい。』と、眞しやかに話した。久兵衛は、『宜しい。借りて來て上げませう。お待ちなさい。』と答へ、質屋から取つて來て右衛門七に渡した。右衛門七は、仕濟したりと、それを携へ、一通の書を久兵衛に遺して、母と共に出奔した。

所が、少年の初旅、道中で、女の關所切手の要ることを知らなかつたので、遠州荒井關迄來て、元來た道を大阪へ引き返し、母を殘して、單身、再び、東下の途に就いた。

質屋は、大に立腹した、久兵衛は、

『あの小僧に、一杯喰はされたか。』と口惜しがつた。

然る程に、その年師走の末、義擧の報が、上方にも傳はつた。一黨の中には、矢頭右衛門七の名も見えた。質屋は驚いた。久兵衛もゐた。曩きの立腹は、一變して感嘆となり、翌年二月、一黨の切腹に及んで、兩人、相謀り、右衛門七の爲めに、追善の法事を營んだ。

× × ×

人を欺くのは、宜しくない。欺いて、擔保の品を取り戻すなどは、亂暴極まる而も、これ等の事に拘泥すれば、人臣の大義を棄てなければならぬ。已むなく、大功は、細瑾を顧みず。「焚嘸」

として、然うした手段に出たのであらう。吾等は、右衛門七の心事に同情する。

若しそれ、欺かれた家主、損をかけられた質屋が、被害者を以て、加害者の爲めに、法事を營んだなどは、世間に稀有としてよい。畢竟、右衛門七の誠に感服したのである。驚くべきは、誠の力かな！

六の四　福島の三片輪

◇猫に小判」「日本俚諺」

福島正則の臣福島丹波、尾關石見、長尾隼人の三人は、何れも、胸に韜略を藏し、武勳赫々の士であつた。關ケ原の役後、德川家康は、勳功の士に、それぞれ賞賜する所があつた中に、順を追うて、三人が出ると、家康の近臣中、目で知らせ、袖を曳いて、笑ふ者があつた。丹波は跛、石見は眇、隼人は聾といふ、揃ひも揃つた不具者ばかりで、世に「福島の三片輪」と稱した。近臣等は、それを笑つたのである。

すると、家康は、

『三人は、武功抜群の者共ぢや。その方たちは、何故、三人の武勇に感じて、自ら勵ますことをせぬか。不心得ぢやぞ。』と叱りつけた。近臣等は、大に赤面した。

×　×　×

人が、人を見、物を見るのは、自分の器量相應に見るのである。家康は、丹波等三人の武功を見た。近臣等は、その外貌を見た。見られる人に、變りはないが、見る人によつて、賞むべくもあり、笑ふべくもある。畢竟、見る人の器量如何に歸着するのである。

英雄を知る者は、英雄である。偉人を知る者は、偉人である。卑劣な、劣等な碌々小人には解らない。役れの此れに於けるは、全く「猫に小判」である。小人の目に貴く見えるのは、爵位の高い華族である。門戸の立派な富豪である。大臣である。大將である。高等官一等である。局長である。課長の椅子に傲然たる一小官吏の偉さは解るが、破れ帽子の中に大宇宙を包藏した、蓬頭垢衣の大思想家の價値は解らない。

解らない者に、解らせやうとするのは、無理である。寧ろ、ショーペンハウエルに傚つて、世人に知られないことを誇りとした方がよい。

人知らずして、慍ほらず。亦た、君子ならずも。「孔子」
假ひ、君子といはない迄も、獨立の人たるには近いであらう。

六の五　短氣な主人

◇十目の視る所、十手の指す所、それ、嚴なるかな。「曾子」

酒屋の主人、極めて氣が短かい。客が、一口飲んで、顏を澁め、
『ぺつぺつ。』とやりながら、
『この酒は、腐つてる。』といふと、眞つ赤になつて、
『御戲言でせう。憚りながら、自慢の酒ですよ。尤も、貴方のやうな下等人間には、濁酒の方が、口に合ふかも知れない。お止しなさい、お止しなさい。』と力む。
『でも、厭に酸つぱいぢやないか。』

『酸つぱきや止せ。手前一人が客ぢやないんだ。商賣の邪魔にならあ。』といふと樂で、ぽかりとやつて置いて、店の柱へ縛りつけてしまつた。
所へ、他の客が來て、理由をたづね、
『ぢや、俺が、飮んで見やう……どれどれ？』
と、これも一口飮んだ限り、コップを下に置いて、
『大將、この人を釋してやらつしやれ。そして、代りに、俺を縛るがいゝ。』

× × ×

常識の人がある。普通一般の人がある。
る。超常識の人がある。
常識の人、非常識の人の、いふ事、する事、考へる事は、誰れにも解る。「十目の視る所、十手の指す所」が一致して、善人とする所は、善人であらう。惡人とする所は、惡人であらうが、如何に威張つても、腐つた酒は、腐つた酒である。人には、眼もある、口もある。世間の定評に、間違ひはない。
が、超常識の人になると、常人には、一寸、目が屆きかねる。その言行が、常

識を逸し、世間離れがし過ぎてゐて、一般の定規に當て嵌らない所から、人は、目して狂人とし、馬鹿とし、度外れ人間として、相手にしない。生前には、殆んど、人に顧みられず、死後に至つて、初めて、眞價を認められた人は、古來、少くない。幸か、不幸か、その人、一般人の目の屆かない、超常識の人であつたのである。

獨逸の大音樂家ベトーベンは、野倒れ死にをした。亞米利加の大文學者ポーは居酒屋の前で斃れた。論語に、

賢なるか、囘や。一簞の食、一瓢の飮、陋巷に在り。人は、その憂ひに堪へず。囘や、その樂みを改めず。賢なるかな、囘や。「孔子」

孔子なればこそ、顏囘の賢を知つたのである。時々は、家賃を滯らせた、貧乏學者の顏囘は、大家の目には、角の米屋、横町の桶屋にも劣る、厄介至極な店借り人であつたであらう。

「十目の見る所、十手の指す所、それ、嚴なるかな。」——常識の人、非常識の人には、この規則が適用される。超常識の人には、除外例があらう。一般人並には

律しかねる。人を見ることは、容易ではない。人は、自分の器量相應に人を見て是れ以上には及ばない。人を見、人を評するの際、愼しまなければならぬ。

六の六　人の慾

◇心を養ふは、慾寡きより善きはなし。「孟子」

「人の慾を斷ちて、心中淸淨なるは、異端の極なり。慾の心を生ずるは、雲の天地間に生ずるに同じ、一年中、天氣晴朗にして、雲行き雨施すことなきときは、草木枯死して、人と禽獸と、皆、餓死すべし。去れば、太虛寥廓の間に、雲を生じ、雨を施すの妙にて、天地萬物、皆、生育を遂ぐるを得たり。人も、心中空虛の處に、男女の慾を生じて、子孫連綿す。此慾は、是れ、天地の正理、生民の大道なり。去ればとて、心中、常に、此慾のみならば、天地、常に雲雨して、晴明ならざるに同じ。是れ亦、萬物の生育を遂げ難し。」（太田錦城）

× × ×

吾等は、無我、無慾を理想とする。何人に向つても、無我になれ、無慾になれと說く。これは、無理な注文であらうか。

無我といつて、我れを無視し、我と我が周圍の机、火鉢などとの區別を撤廢するの意ではない。我れの、我れたることを認めながら、その我れの、又た、萬人萬物と同體不二のものたることを併せ認めて、我れに執着しないことをいふのである。佛者の所謂る、

差別卽平等、平等卽差別。

の理を了る——これが、無我である。平等を視て、差別を視なければ、「惡平等」に墮ちる。差別を視て、平等を視なければ、惡差別に、墮ちる。何れも、中道ではない。兩者を同時に視て、我れをくみせず、我れに執着しないが、吾等の所謂る無我である。

我れに執着する者は、只管、我意を張り、我見を執り、無理から、これを押し通さうとかゝる。自然に從ふことが出來ない。天命に安んずることが出來ない。

事には、天命、自然の領分と、人力と人爲の領分とがある。死すべくして死し、窮すべくして窮するのは、天命、自然の領分で、人力、人爲の如何ともすべからざるに屬する。醫療に盡し、努力を加へるのは、人力、人爲の領分内に在つて、これを試みること、素より妨げぬが、尙ほ且つ、死を免れず、窮を脫せずとすれば、それは、天命である、自然である。たゞ、これに安んずるの外はない。

人事を盡して、天命を俟つ。「孔子」

とは、この事である。

天の爲す所を知り、人の爲す所を知る者は、至れり。天の爲す所を知る者は天の雨に生ずるなり。人の爲す所を知る者は、この知の知る所を以ひて、以て、その知の知らざる所を養ふ。「莊子」

とは、亦た、この事である。然るに、世間我執の人は、自ら揣らずして、天命自然の領分に立ち入り、無理にも、我が意を貫かうとして、自ら苦しめ、惱ます無理とは、天命に逆らひ、自然に反することである。無我を理想とする吾等の取らない所である。

無我を理想とする吾等は、又た、無慾を理想とする。吾等が、無慾になれ、と說くに對しては、第一に、

『人間、慾のない者はない。慾は、人間の自然ぢやないか。』といふ非難があり、第二には、

無慾で、何う、世渡りがなるものか。』といふ非難がある。吾等の眞意は。全然、慾を棄てるといふのではなくて、たゞ、物に執着しない、といふに在る。この點、篤と、了解を要する。

成程、人間、慾のない者はないが、慾にも、色々ある。當眼の慾もあり、追憶の慾もあり、想像の慾もある。渇して水を思ひ、飢ゑて食を思ふのは、當眼の慾である。これのあること、勿論、妨げぬ、過去を追憶して、

『あゝ、惜しいことをした。』と悔み、未來を想像して、

『若し、この金がなくなつたら……』と、取越苦勞をするのは、所謂る、執着あるもので、吾等は、この種の慾を嫌ふ。

將た、この世は、無常の世である。

長者に二代なし。「日本俚諺」

といふのが常で、ある財産も、何時かは、なくなる。なくなるべくしてなくなる財産、諦めるの外はないが、諦めかねて、惜しがり、悲しみ、胸を打つて泣くのも、執着の爲である。

金は、使ふ爲めの金である。使ふべくして使はない。亦た、執着である。親類知人の困窮を餘所に見、世間の貧乏人にも施さないで、固く固く、身代を守るのこれを稱して、吝嗇といふ。やはり、執着に外ならぬ。吾等の忌む所は、この執着である。

卽はち、慾は、自然であるには相違ない。慾がなくて渡られる世の中でないには相違ない。たゞ、物に執着するに至つて、弊の堪ふべからざるものがある。慾はよい。執着が惡い。吾等が、無慾を理想とし、無慾になれと說く、その慾は、物に執着するの意であることを、特に、こゝに斷つて置く。

尙ほ、太田錦城の說は、男女の慾に就いての立言らしいが、吾等は、その慾といふに因み、廣く、物慾に關して、平生の懷抱を述べた。錦城の說と、何等か、

交渉する所があるならば、それは、たゞ、興に俱に、慾に關する說であること、これだけかも知れぬ。

六の七　厨宰坪内の氣焰

◇食へども、その味ひを知らず。「中庸」

三好家の滅びた時、料理の上手と聞えた坪内某といふが、織田方へ捕はれ、放囚になつてゐた。幾年かの後ち、

『坪内は、鶴、鯉の料理は申すに及ばず、七五三の儀式なぞも、よく、心得てをりまする。その上、子供二人は、既に、御奉公致しをること故、お免しあつて、厨の事を司らせるやうなされませ。』と、信長に告げる者があつた。信長は、

『では、明朝の料理をさせよ。その鹽梅次第ぢや。』と命じた。

『乃で、坪内が、膳を進めると、信長は、一口、食つて見て、

『水臭くて、食はれぬ。それ、殺してしまへ。』

と立腹した。坪内は、蒼くなつて、

『承はりましてござりまする。今一度、差し上げまして、それでも、お氣に召しませんでしたら、お詫びには切腹仕りまする。何卒、御猶豫を願ひまする。』

『然やうに致せ』との言葉に、坪内は、そのい、信長は、大層喜んで、以後、扶持を與へることにした。

坪内は、退いていつた。

『昨日の鹽梅は、三好家の風で、今朝の鹽梅は、三番目の鹽梅です。三好家は、代々、足利將軍家の事を執り、日本國中の政をも取り扱つた家ですから、何事も、卑しくありません。今朝の風味は、野鄙な田舍風です。それが、お口に合つた所を見ますと、世間に、食事をせぬ者はありませんが、味の解る人は、さてさて、少いものです。』斯ういつて、太息したとか。

× × ×

食物の味ひは左に右、名畫の味ひは、如何？　大家の手に成つた、詩、歌、俳

句の味ひは、如何？　名人の彫刻物の味ひは、如何？

それよりも、聖人、君子の言行の味ひは、如何？　英雄、豪傑の行跡の味ひは如何？　食物の味ひさへ解らない者に、これ等の味ひの解り得やう筈はないが、これの解つた人でなければ、眞に、物の解つた人ではない。

すべての物、皆、味ひを持つてゐる。物の道理が解つても、その味ひが解らねならば、それは、物の半面だけが解つたのである。道理は、物の形體である。味ひは、物の生命である。道理と味ひとが、共に解つて、初めて、物が解つたのである。

道理は、理智の事である。味ひは、感情の事である。世間、理智の修養の大切なことを知つて、感情のそれを等閑に附するは、如何？

□うけつぎし國の司のかひもなし
めぐまぬ民にめぐまるゝ身は。

徳川吉宗

六の八　本多忠籌賄賂を贈賄せず

◇義を見てせざるは、勇なきなり。「孔子」

何時の頃からか、江戸城内では、新たに、若年寄などの重職に就いた者から、大奥の老女へ、紅白の縮緬、金銀を贈るの弊習が行はれた。大奥の老女は、非常に威勢張つたもので、これに金品を贈つたのは、名は、披露の印しとでもいつたのであらうが、實は、賄賂に外ならなかつた。男が女に賄賂を贈る——妙なわけではあるが、多年の習慣、誰れも、それを怪しまなかつたのである。

所が、本多忠籌のみは、若年寄になつた時、

『自分は、小祿ぢや。それに、近來、頻りに、凶作が續いたので、そんな贈り物をする餘裕がない。且つ、今度の事は、望み請うての御任命ではない。贈り物の先例に違つて、爲めに、怒りに觸れ、職を剝がれるやうな破滅にならうとも、少

しも、恥辱とは思はぬ。旁た、そんな贈り物はせぬ。』といつて、斷然、贈賄しなかつた。

× × ×

世間の習慣には、隨分、無意味なのがある。無意味なのは、まだ、忍ぶことも出來るが、有害なのは、甚はだ困る。人の言葉や思惑に頓着せず、敢然として、これに抗し、斷乎として、これを改むべきである。

が、習慣を改めるといふこと、談、容易ではない。西諺に、

習慣を道理に代用する者は、愚人である。

といふが、習慣には、何か、道理の根據があるやうに思ふのが、衆人の常で、有識者の說を聞いて、初めて、

『成程、然うですねえ。』と感心する。感心しながら、やはり、その習慣を墨守して、改めやうとしない。能く、改めるに堪へるのは、識あり、膽あり、勇あり、斷ある、例へば、忠謇の如き人でなければならぬ。

六の九　意地の汚い者

◇壁に耳、石の物いふ、世の中に、人知らじとて、惡し事すな。「古歌」

意地の汚い男、鼠不入を開けて、里芋の煮轉がしたのを、三つ四つ、頬張つた所へ、妻が、外から歸つて來て、何か物をいひかけた。男は、返辭が出來ない。といつて、迎へたばかりの妻の前へ、口の中の物を吐き出すのも、何とやら、きまりが悪い。目ばかりぱちくりやつてゐると、妻は、不思議に思つて、

『貴方、何うかなすつたの？』といひながら、夫の頬を壓へて見て、

『おやおや、ひどく、しこつてゐる。腫物に相違ない。』と、早速、醫者を招んだ。

醫者も、切りに、首を傾げて、

『成程、これは、腫物が出來たのですから、放つて置けば、一命にも關はります。切開する外はありません。』といふ

と、刀を執つて、ざくり、ざくり！臆でも出るかと思ひの外、顯はれ出でたる里芋の煮ころがしに。

『おやおや……』

× × ×

壁に耳あり、疊に目あり。「日本俚諺」

惡事を働いて、永久、露見しないものと思ふのは、淺慮の沙汰である。惡いと氣がついたら、我れから進んで、自白するがよい。それは、隨分、苦しいであらう。けれど、他から露見するのは、一層苦しい。

六の一〇 自然の道

◇全きを天に得る。「列子」

「醉へる者の、車より墜つるや、疾むと雖も、死せず。骨節、人と同じくして、犯害、人と異なり。其の神、全ければなり。乘るも、亦た、知らず、墜つるも、亦た、知らずして、死生、驚懼、胸に入らず。此の故に、物に逆ひて懼れず。彼れ、全きを酒に得て、猶ほ是くの如し。而るを況んや、全きを天に得るをや。」

（列子）

× × ×

私智を用ひず、私案を弄せず、無我、無心にして、たゞ、自然にこれ任せる者は、その心、萬人と一體であつて、その身、萬物と不二である。宇宙は、虚無である。有でなく、無でなく、大でなく、小でなく、東もなく、前もなく、後もなく、差別と平等とが、圓融相卽して、何とも名狀し得ないものである。强ひて名狀して、虚とし、無とする。彼れは、この虚を體するものである。

これを稱して、「全きを天に得る」といふ。

酒に醉つた者は、これに近い。無我、無心、以て、虚無を體する彼れ、素より私智なく、私案なく、たゞ、自然に任せ、天命に任せた限りである。車から落ち

ても、落ちるが儘に落ちて、人爲を用ひないから、却つて、怪我をせずに濟む。

我々が、怪我をし、失敗を演ずるのは、大概、自然に逆つて、私智、私案の無理を出すからである。火事に出遇つては、逃げるの一手があるばかり。

『この品、燒いてなるものか。』と、頑強に踏み止まるのは、無理である。その無理から、品物どころか、體も、燒いてしまふ。

富んで、人を惠むのは、自然である。あるものを、ない顏して、舌も出すまいとすると、親類に怨まれ、朋友に怒られ、世間に指彈されて、果ては、その身を失ふ。貧しうして、質素、儉約を守るのは、自然である。强ひて、贅澤をしやうとすれば、人の物に手を出して、刑務所へ送られなければならぬ。

一日に、十里迄位る歩いてゐる。これ、自然である。

『それでは、遲れる。』との私案を出して、三十里づゝも走らうとすると、途中で倒れたり、心臟麻痺を起したりする。皆、天命に安んぜず、自然に逆らふ爲めに然うした失敗があるのである。流れ川を横ぎる者は、流れに從つて、斜に向ふ河岸へ渡る。一直線に泳ぎ着かうとすれば、疲勞は一倍、川の眞ん中でへたばつてしまふ。世を渡るのは、川を渡るが如くである。私心、私案の無理は通らぬ。無我、無心、虛無の身となり、天命に任せ、自然に從ふ時、初めて、安全な世渡りが出來る。

六の一一　後德大寺屋根の鳶

◇哀憐は、裁判に勝つなり。「基督」

後德大寺實定は、寢殿に鳶を止らせないやうと、繩を張つた。西行は、それを見て、苦々しく思ひ、

『鳶が止まつたとて、何でもあるまい。卿の心持ちは、この一事で解る。』といつて、その後は、曾つて、後德大寺家へ出向かなかつた。

×　×　×

近來、一般に、權利思想が發達したのは、結構なことである。世には、亂暴者

が多い。或ひは、權勢、富貴に乘じて、或ひは、奸才、暴力を弄して、不法に、他人の權利を侵害してかゝる。これに對しては、宜しく、正當の手續に據つて、防禦の途に出づべきである。

が、相手構はず、事情構はず、譬へば、屋根に鳶が止まる、溝板に犬が寢る、といつたやうな些々たる事柄にも、權利呼はりをし、寸毫と雖も、自家の利益を讓らうとしないのは、餘りに醜である。

「それ位の事は、まあ、赦してやり給へ。』

『だつて、權利は權利だ。僕のいふことが、無理かね?』と力む。無理ではない。理屈ではある。が、萬事、理屈で押して行かうとするのは、三百代言の態度である。高利貸しの仕方である。血も涙もない冷血動物のすることで、人間らしい人間としては、理屈よりも、寧ろ、愛に據つて——人情に據つて、事をすべきである。「哀憐は、裁判に勝つなり。」——天國に於て然り。人間に於ても、亦た、宜しく、然るべきである。

六の二二　佛行坊の無我無心

◇世を捨てゝ、身はなきものと、思へども、風の吹く日は、寒くこそあれ。

「古歌」

佛行坊敬巳は、元と、江州日枝山無動寺善住院の一代であつたけれど、院務を厭ひ、まだ、中年の頃、坂本へ隱居し、律義を保ち、只管、念佛の一行に歸した俳諧が好きで、佃坊と親交があつた。その句に、

蚊一つに、施しかぬる、我が身かな。

淨土に志を決した身にも、流石、我執の離れ難いのを、自ら、戒しめたものとか。

或る日、佃坊が、訪ねて徃つた。雜談數刻、大分、空腹になつて來た所で、『門前に蕎麥屋がございます。こゝへ取つて食べませうか。面倒と思し召すなら

あそこへ參りませうか。』と尋ねると、佛行坊は、少時、首を傾げ、思案して、『門前へ行けよ』とばかり、平氣でゐた。生活ぶり、交際ぶりの簡易なことは、萬事、この通りであつた。

寶曆六年四月十七日、弟子の取り出す自畫像に、

往かう往かうと、思へば何も、手につかず、往こやれ西の、花の臺に。

と書きつけ、西に向つて合掌し、靜かに、息を引き取つた。

× × ×

捨てた身である、無我の身である。「蚊一つに施しかぬる。」とは、如何？「風の吹く日は、寒くこそあれ。」とは、如何？

が、それは、然うあるべきである。「捨てた身」は、「死んだ身」ではない。無我は、この身が、消えてなくなるのではない。「我れ」が、我れの無我を認めるのである。有我と無我とが、互ひに、圓融相卽、融通無礙の關係に於て存するのが、無我である。有我であつて、同時に無我、無我であつて、同時に有我——斯ういふのが、眞の無我である。

有我である。蚊一つにも施しかねやう。風の吹く日は、寒くもあらう。何の不思議もない。

けれど、同時に、無我である。蚊に喰はれても、然迄は、腹も立たぬ。寒くとも、大して、辛くは思はない。死生存亡、吉凶禍福、毀譽褒貶、利害得失、如何なる運命に會しても、一時、

『これは？……』と驚くばかり、忽ち、平生の態度に返つて、夷然として、天命に安んじ、平然として、自然に任せる。

この身を、枯木死灰にして、全然、無感覺になることは、出來得べくないし、又た、望ましくもない。人間は、生きてゐる。感情の動物である。誤まつて、惡無我、惡平等に墮するならば、死後、地獄の釜が恐ろしい。

□不正の、所業を行ひ、或は、損害を與ふべからず。

自分の職分を怠りて、他人に

六の一三　寢小便小僧

◇自分の悪い事を棚に上げる。「日本俚諺」

或る小僧、毎晩のやうに、寢小便をする。

『これでは、蒲團が堪らない。』と、主人の工夫で、馬小屋の二階に寢かすことにした。二階は、竹の簀になつてゐる。小僧が小便をすると、簀の子の間から、瀧のやうに流れ落ちて、馬小屋の中の藁にかゝる。馬が、それを踏む。こゝに、結構な肥料が出來る、といふ寸法で、所謂る、一擧兩得の計である。

所が、或る夜、簀の子が折けて、小僧は、どつと、馬小屋の中へ落ちた。何分疲れ切つてゐることとて、その儘、ぐうぐう高鼾！

賢いのは、馬である。それを家の人に知らせる心組か、後脚で、とんとん、羽目板を蹴りながら、小僧の顏へ、烈しく、鼻嵐を吹きかける、小僧は、やつと、

目を覺したが、馬のゐるのに氣がつくと、吃驚仰天、

『やあやあ、大變だ。馬が、二階へ上つて來た。おい、おい、誰か來て吳れい！　おいおいおい……』

× × ×

自分が、落ちて置きながら、馬が、二階へ上つたとは、驚き入つたる小便垂れかな！

が、人間、自分の事は、存外、氣がつかない。人と爭ふ者は、自分の惡い事を棚に上げて、たゞたゞ、相手を怒り、怨むのが、常である。大學に、

人は、その親愛する所に之いて辟す。

とあるが、人の最も親愛する所は、自分である。自分の曲事の判らないわけである。世間、小便垂れならぬ者がどこにあらう？

若し、あるならば、無我、超脫の人のみが、それである。

は、他人の如く、他人を見るは、自分の如くである。從つて、相手の曲事を知ると同樣に、自分の曲事をも知る。復た從つて、相手を怨し、自分を責める。同じ

く大學に、

好んで、その惡を知り、惡んで、その美を知る者は、天下に鮮し。

とあるが、所謂る鮮い者は、彼れの事である。彼れの裁斷は、公平無私である

六の一四　畠山重忠の覺悟

◇死生、命あり。富貴、天に在あり。「孔子」

「我れ、生涯、非道、非義の事をせず、正路を以て、宗とし、寢る間も、私の心を挾まず、精忠を守ると雖も、無實の罪を以て死せんとす。是れ、天の命なり何をか恨むべき。若し、今、本國に引き返し、防戰に及ばゞ、兼ねて、隱謀ある に似たり。虛名、忽ち、實となつて、不忠の臣と呼ばれんこと、死後の悔いたるべし。玉は、碎けても、其の潔きを現はす、といへり。讒者の爲めに橫死するも信義を失ふべからず。我が心の潔白は、神明、克く、照覽あるべし。討手來ると

も、甲冑を帶すること勿れ。「畠山重忠」

× × ×

俎上の鯉は、動かずして、刀を待つとか。降りかゝつた凶事、災難から脫出して、安全の地に就かうとするのは。然ることながら、最早、免れ得ない運命と見た上は、安んじて、その運命を受けるの外はない。所謂る、天命に從ふのである自然に任せるのである。

が、この事、常人には難かしい。藻掻き、焦躁り、女々しい、未練がましい、種々の痴態と狂態を盡して、彌が上にも、苦痛を咎める。天命を知らないのである。

我々は、死なければならぬ。泣いて死なければならないか。笑つて死ぬことは出來ないか。我々は、時に窮することを免れぬ。窮して藻掻かなければならないか。夷然たるのは、宜しくないか。否、そんたわけはない。

六の一五　大西郷の大腹中

◇蔦飛んで、天に戻り、魚、淵に躍る。「詩經」

西郷の大至誠と、勝の大果斷と、兩々相待つて、江戸開城の議は、談笑の間に決せられた。官軍に西郷なく、幕府に勝なく、事の成行に任せたならば、江戸は焦土と化したかも知れぬ。

明治元年四月四日は、江戸城授受の當日である。西郷は、橋本、柳原の兩勅使、及び、參謀四名と共に、入城した。勅使は、德川方の田安中納言等に、勅命を傳へられた。

式、既に終つて、西郷の姿が見えない。大久保一翁は、尋ね尋ねて、一室に仰臥し、鼾聲、雷の如き西郷を發見した。搖り起して、

『勅使も、最早、退城せられた。歸らうではないか。』といふと、西郷は、亙軀を起しながら、

『殿中の立派なのに見惚れて、釘隱しを數へてゐる中に、つひ、睡くなつて……』と答へ、象の如くに、悠歩し去つた。

× × ×

大は、小に對するの名である。小を外にして、大のみなる大はない。小は、大に對するの名である。大を外にして、小のみなる小もない。畢竟、比較しての事である。

であるから、標準を何れに置くかに依つて、大も、小となり、小も、大となる明治元年の江戸開城は、大事件であつたに相違ない。歷史に見える他の事件を標準に取れば、確かに、大事件であつた。民間に行はれる家屋の賣り渡し、明け渡しに比較すれば、眞に、これ、驚くべきの大事件であつたに相違ない。

が、東西の史上、あれ以上の大事件も、多々ある。又た、我々は、あれに百倍千倍する大事件を想像することも出來る。それから見たら、何んなものか。高が一德川氏の滅亡に過ぎぬ。否、德川氏は事實上、夙に亡びてゐて、江戸城の授受

は、それに附隨する所の、附屬事件に過ぎぬ。それが、何の、大事件であらう？大人物は、常に、天下、國家、或ひは、全世界の大問題を考へてゐる。である から、大概の事件は、彼れの爲めには、小事件である。驚きもしなければ、恐れもしない。

反對に、小人物は、平生、一身、一家の小問題に齷齪としてゐる爲めに、僅かの變事に會しても、目して大問題とし、驚擾して、制するを知らぬ。千圓、二千圓の貸し倒れが出來ても、肚胸を突き、蒼くなり、喪心し、失神した揚句、『あゝあゝ、自分位る、不運な者はない。寧そ、死んで除けやうか。』などと、僅かな金と心中するやうな氣にさへなる。

今　南洲は、大人物であつた。その大頭裡を徂徠したのは、天下、國家の大問題のみであつた。それも、一時の問題ではなくて、所謂る百年の大計であつた。その見る所は、江戸開城は、既定の事實で、特に關心すべき事件ではなかつた。將軍の去つた跡の江戸城は、たゞの空家に過ぎなかつた。側目には、江戸城内で晝寢したのである。南洲自身には、空家の一室で、つひ、いゝところとなつた迄である。尋常の茶飯事に過ぎぬ。異とするに足らぬ。これを異とするのは、小人物の事である。

大人物は、大事をも、小事と見る。小人物は、小事をも、大事と見る。若しそれ、事を單に事とのみ見て、大小を併せ忘るゝに至つては、たゞ、無我、超脫の人の事である。

六の一六　佛行坊と山法師

◇上見れば、あれ欲し、か欲し、ほしだらけ、笠被てくらせ、己が心に「古歌」

或る年の春、比叡山の僧が、大勢、佛行坊を訪ね、今を盛りの櫻を賞めると、坊は、

『この花の散らぬ中に、今一度、來るがよい。』と告げた。一同、

『きつと、伺ひます。』と約して歸り、他日、競ひ合つて行くと、終日、茶を出さ

蔬食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて、これを枕とす。樂み、亦た、その中に在り。

とばかり、一切、金に目をかけなかつた孔子もあれば、一簞の食、一瓢の飲、以て、陋巷に晏如としてゐた顔回もあり、いつと手嚴しく、金を失ふのは、汚物を失ふのである。と喝破した人もある。蓋し、これ等諸賢哲の爲めには、地上、最大の價値を有するものが、道義、道徳であつたのである。眞、善、美の理想であつたのである。

金に次いで、一般人の貴ぶものは、名である。賞名と虚名とを別たずして、たゞ、名を好み、何でも、人に知られんことを願ふ。けれど、古來、賢哲の、名を厭ふは、利を厭ふと同斷で、名利を併せて、これを唾棄した。江村專齋が、

名利、兩つながら、好むべからず。名を好む者は、利を好む者に比すれば、較や勝れり。名を好めば、爲さゞる所あり。利を好めば、爲さゞる所あり。

の一句である。

六の一七　犬の目と人の目

◇見る人の、心ごころに、任せ置きて、高根に澄める、秋の夜の月。

内傷眼の爲めに、俄かに盲人になつた男が、眼科醫の許へ診て貰ひに行つた。

醫者は、

『よしよし、俺が、治して上げるよ。』と引き受けて、兩眼を抉り抜き、燒酎で奇麗に洗つて、吊し柿のやうに絲で繋ぎ、竿に掛けて干して置くと、鴉が目つけてその一つを啀へて行つた。

醫者の驚いたことはない。けど、工夫もあるもので、庭に臥てゐる犬仔の一眼を抜き取り、彼の一眼と一對にして、男の眼の穴へ、ことりと嵌めた。

後刻

『何うかね、見えるかね？』
『はい、よく見えます。』
醫者は、笑ひながら、
『何か、變つたことはないかね？』と尋ねると、
『變つたこと？』と考へて、
『只今、便所へ行きまして、下を覗きますと、右の眼では、汚く見え、ましたが、左の眼では、何とやら、好ましく見えました。』と答へたとか。

× × ×

事物の價値は、事物そのものに存ずるのではなくて、事物とこれに對する人との關係の中に認められるのである。
であるから、同じ一つの事物でも、甲の人には、貴く、好ましく見え、乙の人には賤しく、忌はしく受け取れる。
例へば、通常一般の人に取つて、最も好ましいのは、金である。十人が九人迄金の爲めに、日夜、役々汲々として、憂き身を窶してゐる。けれど、

蔬食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて、これを枕とす。樂み、亦た、その中に在り。

とばかり、一切、金に目をかけなかつた孔子もあれば、一簞の食、一瓢の飲、以て、陋巷に晏如としてゐた顔回もあり、もつと手嚴しく、
金を失ふのは、汚物を失ふのである。
と喝破した人もある。蓋し、これ等諸賢哲の爲めには、地上、最大の價値を有するものが、道義、道徳であつたのである。
金に次いで、一般人の貴ぶものは、名である。實名と虚名とを別たずして、たゞ、名を好み、何でも、人に知られんことを願ふ。けれど、古來、賢哲の、名を厭ふは、利を厭ふと同斷で、名利を併せて、これを唾棄した。
江村專齋が、

名利、兩つながら、好むべからず。名を好む者は、利を好む者に比すれば、較や勝れり。名を好めば、爲さゞる所あり。利を好めば、爲さゞる所あり。

といつたのは、興しての説で、佐藤一齋は、斷乎として、いつてゐる。

毀譽、得喪は、眞に、これ、人生の雲霧なり。人をして昏迷せしむ。この雲霧を一掃すれば、則はち、青天白日なり。

と。これ、古今賢哲の定論である。

卽はち、衆人の貴ぶ所は、賢哲の賤しむ所である。同じ事物でありながら、見る人毎に、見る所を異にし、或ひは貴び、或ひは賤しむ。事物の價値が、事物そのものに屬せずして、事物と人との關係中に存するの理、以て、了すべきである。衆人が、名利の二つをこれ貴んで、爲めに、或ひは、狂せんとするのは、これを賢哲より見る、犬が、糞にあこがれて、その臭さを思はないのと一般である。犬の目でなければ、幸ひである。

左右は、目の問題である。希くば、人々、自ら顧みて、己れの目が、何んな目であるかを靜慮せんことを。

六の一八　愚を守る

◇聰明叡智、これを守るに、愚を以てす。「家語」

「假りにも、我れを智ありとし、善なりと思ふべからず。吾が身の力を恃みて、人を愚なりとし、侮るべからず。諫めを拒ぎ、我れを是とすべからず。人、至りて愚なりと雖も、一事の善なきこと能はず。故に、愚人の言をも、理あるは、取り用ゆべし。我れを智ありとするものは、必らず、愚人なり。我れを善なりとするものは、必らず、惡人なり。我が惡を知るものは、大惡にあらず。人を侮るものは、必らず、天の咎めあり、人の怨みあり。我れに、學問、智慧、藝能ありとも、是れ、皆、我が分內の事なれば、矜るべきにあらず。是れを自慢し、人を侮るべからず。古への君子は、聰明、叡智なれども、之を守るに愚を以てす。況んや、末世の凡人、僅かなる才能にほこるは、片腹いたきことなり。」

（貝原益軒）

× × ×

眞の善人は、自分を不善人とこそ思へ、善人とは思はない。已れの善の、至らぬことをこそ知れ。

『自分は、これこれの善をした。これだけすれば、澤山だ。自分は、一廉の善人だ。』などとは、夢想だもしない。

善は、行ひ難いものである。一分、名利の慾を挟んでする善は、眞の善ではない。報酬を目がけての善は、眞の善ではない。名聞を思ふが爲めの善は、眞の善ではない。善も行つて、善を行つたことに誇りを感ずる善は、眞の善ではない。

眞の善は、無我の善でなければならぬ。

又た、不思善の善でなければならぬ。その、善を行ふのは、善と知つて行ふのではない。將た、善であることを理由に行ふのではない。それは、たゞ一片の至情、已むに已まれずして行ふ所が、求めずして、道に叶ひ、善になるのである。世間、誰れあつて、這般の善を行ふに堪へるか。自分を善人視するなどは、善といひ、悪といふの、何事を意味するかをさへ知らない者の事である。已れの善に誇るが如きは、以ての外としなければならぬ。

同様、自分を智者とし、

『俺は、賢い。萬般の問題、一として、通ぜざるなしだ。』などと已惚れるのも、間違つてゐる。

孔子曰く、

あゝ、それ、物、焉んぞ、滿みて覆へらざるものあらんや。「家語」

と。乃で、子路が、滿を持するの道を問ふと、

聰明叡智、これを守るに、愚を以てす。功、天下を被ふも、これを守るに、讓を以てす。勇力、世を振はすも、これを守るに怯を以てす。富、四海を有つも、これを守るに、謙を以てす。これ、所謂る、これを損して、又た、これを損するの道なり。「同」

と答へた。聰明叡智も、露はにこれを用ふれば、必らず、事を破る。況んや、

小利巧、小才など、何になるものではないか、自ら智ありとする者は、左右、その智を用ひたがる。小利巧、小才をこれ弄して、無理をし、不法を働き、その、結局、自ら禍ひする所以であることを知る眞の智者のみ、これを守るに、愚を以てして、その智を用ひず、以て、身を全うし得るのである。

愚を以て守るといふ。偽はつて、愚人の眞似をするのではない。表面、愚人と見せかけて、蔭で、こそこそ、悪い事をするも、そんな意味ではない。眞の智者は、小利巧の、甚はだ、あてにならないことを知つてゐる。小才を弄するの、餘りに醜い爲であることを知つてゐる。

八百の、嘘を上手に、列べても、誠一つに、敵はざりけり。「手島皆庵」

人に貴いものが、智慧でなく、才能でなく、たゞ一つの誠であることを知つてゐる。大事業の、必らず、誠に依つて成さるべくして、區々たる才智の及ぶ所でないことを知つてゐる。小才、小利巧といへば、何れ、一身の利害とか、毀譽とかいふ、小問題に用ひられるのであらうが、然うした小問題の、殆んど、關心するに足りないものであることを知つてゐる。さては、小智慧を弄しないのである。小才を用ふるに忍びないのである。これを稱して、愚を守るとか、拙を守るとかいふのである。猫被りの意味ではない。

六の一九　兼行と樹上の僧

◇一寸先は闇。「日本俚諺」

何時の年か。五月五日、兼行法師等が、加茂の競馬を見に行くと、車の前に、町人、百姓、大勢の者が立ち塞がつて、見ることが出來ない。一同、車を下りて埒の際へ行つて見たが、こゝも、人で一ぱいで、何うすることも出來ないのであつた。

時に、一人の僧があつて、向ふの樗の木に登り、木の股にしやがんで、見物してゐた。取りつきながら、ひどく睡つては、落ちさうになると、目を覺す。それ

が、度々に及んだので、見る物は
『馬鹿な坊主だ、あんな危い枝の上で、安心して睡つてゐる。』と、嘲り嗤つた。
それが耳へ入ると、兼行は、ふと、思ひついた事がある。
『人間は、何時死ぬやら、判らぬものぢや。たつた今かも知れぬ。それを忘れて物を見て日を暮す愚かさは、あの法師以上であらうよ。』といふと、前にゐる人たちは、
『眞實です。人間は、馬鹿なものです。』といひながら、後ろの兼行たちを見返つて、
『こゝへお入りなさい。』と、場處を譲つた。兼行たちは、お陰で、樂に見物することが出來た。

× × ×

危いとも危いものは、人の命である。板子一枚の下が直ぐ地極なる船乗り生活を、我々は、危い限りのやうに思つてゐるが、凡そ、地上に住む者は、船乗りと變りがない。名よ利よと、血眼になつて騒ぐのは、地獄の眞上で、舞踏をしてゐるのである。その何時、二階が落ちて、鬼の捕虜にならうも知れぬ。
果敢なしや、今朝見し人の、面影の、立つは煙の、夕暮の空。
こんな例は、屢ば、我々の見聞に上る。決して、珍らしい事ではない。船乗りのみかは、樹上に坐睡の僧のみかは、我々の命こそ、常に、同様に危いのである。
が、この事實に對して、徒らに、悲哀の情を催すのは、愚である。宜しく、その間に存する至大の教訓を聽取して、慾を制し、非道を止め、怒りを去り、怨みを捨て、進んで、人に善を施し、何時、死に臨んでも、既往を顧みて悔恨のないやうにと、朝に、夕に、心がくべきである。
若しそれ、更に進んで、宇宙を知り、人生を了し、この心、萬人と一體、この身、萬物と不二、人間、元來、無我のものであることを、篤と、會得するやうならば、最早、死もなく、生もない。これ、常人の及ばない所であるが、人を這般の問題に驅るものは、亦た「一寸先は闇。」といふ、この驚くべき運命である。
世の中の、はかなき事を、外にして、何が佛の、道に入るべき。

と詠んだ人もある。

見よ、市井の小人の、平生、我慾、我執を事とした者も、無常を説く衆行の一言に感じて、席を譲るに至つたではないか。而も、日暮里、町屋、桐ケ谷の烟は同様の理を、一層雄辯に開說しつゝあるのである。

六の二〇　鳥巢和尙と白樂天

◇年を經て、浮世の橋を　見返れば、さても危く、渡りけるかな。「古歌」

唐の道林和尙といふ大德は、平生、松に樹の座を設けて、座禪した所から、世間で、鳥巢和尙と呼んだ。有名な詩人の白樂天、當時は、或る諸侯に仕へて、大夫の官に在つたが、和尙の德を慕ふの餘り、或る日、大勢の供を連れて、訪れて行くと、和尙は、例の通り、松の樹の上に、座禪をしてゐる。白樂天は、下から見上げながら、

『さてさて、危ない處にをられるものぢや。』

と、聲をかけた。和尙は、からからと笑つて、

『貴公は、愚僧を見て、危ないといふ。愚僧の眼には、貴公こそ、危ない、危ないい。』

『否、手前は、現に、大夫の顯職に在つて、而も、御覽の通り、大勢の家來を召し連れをれば、少しも、危ないことはござらぬ。』

『その心が危ないのぢや。貴公は、德もなく、道も知らず、又た、智慧もない癖に、大夫となつて、一國の政治を自由にする。且つ、大勢の家來を持つてをるのぢやから、貴公に、一念の過ちがあれば、爲めに禍ひを蒙むるのは、貴公一人ではなく、家來から、國中の者迄、皆、不時の難儀を受けまいものでもない。愚僧は、斯く、高い樹の上にをるけれど、落ちぬだけの構へがある。萬一、落ちるにしても、自分一巳の災難で、他に害を及ぼす憂ひはない。』と說き聞かせると、樂天は、大に感心して、

『如何にもあり難いお示しと承はる。といつもの事に、佛道の大意をお聞かせ下さ

れよ。』と請うた。和尚は、
諸惡莫作、衆善奉行。
（諸ろの惡は、作すこと莫れ。衆くの善は、奉行せよ。』
の佛語を擧げて、答へとした。今度は、樂天が、大笑ひして、
『それ位ゐの事は、三歳の童子でも、知つてをりませう。』と、無遠慮にいつて除けた。和尚は、平氣なもので、行ふことは難い。』と答へた。
『三歳の童子も、知ることは易いが、八十の翁も、

× × ×

彼れは、樹上に坐睡る人。此れは、樹上に座禪をする人。彼れも危ない。此れも危ない。より以上に危ないものは、人間の命である。必らずしも、命といはぬ。人間のする事は、すべて、危ない。限りのある力を以て、限りのない慾に從ふ。これ、危ない。些かの小利巧を恃んで、無理なことをする。これ、危ない。
最も危ないのは、德なくして、高位高官に昇り、國民の上に、生殺與奪の權を

弄ぶことである。人爵は、天爵に伴ふ時にのみ、價値がある。天爵なくして、人爵があるのは、以て、その人一人の虛榮心を滿すには足らう、衆人に取つては禍ひの骨頂である。國威も、彼れの爲めに、墜ちてしまふ。國富も、彼れの爲めに、滅損してしまふ。風敎も、彼れに、廢せられてしまふ。孟子曰く、
庖に肥肉あり。廐に肥馬あり。民に飢色あり。野に餓莩あり。これ、獸を率るて。人を食ましむるなり。
と。知ちず、今の高位高官者は、如何？

六の二一　歸路の遠近論

◇動かざれば等し。「二宮尊德」

宴會終つて、いざお開きといふ時、一人が、隣席を顧みて、

『貴方は、いゝですわね、お家が近いから、私は、品川迄歸るのだから、大變ですよ。それに、昨今は、電車が込みましてねえ。』といふと、それをきつかけに、誰れが近い、彼れが遠いと、道の遠近論が始まつた。結局、こゝの主人が一番近いといふことで、一同、大笑ひをすると、室の隅に醉ひ潰れてゐる男が、起きも上らず。

『否、もつと近い者があるぞ。』

『誰れだ？　誰れだ？　主人よりも近いなぞと、そんな者はありやしない。』

『否、ある。斯くいふ俺が、一番近い。』

『何故？　お前の家は、新宿ぢやないか。』

『新宿でも、長崎でも、俺が、一番近いのだ。といふわけは、主人も、寢るには寢所迄行く。俺は、金輪際、この場を動くものぢやない。』

× × ×

醉ひ倒れの動かないのは、厄介至極であるが、この心の動かないのは、甚はだ結構である。二官尊徳は、不動尊を「動かざれば尊し。」と讀んで、平生、淺から

ず尊信したといふ。

心は、左右、動き易い。曰く名、曰く金、或ひは美人、或ひは最新の流行服と見るに就け、聞くに就けて、その方へ動き、その物に留まつて、還るも知らぬ。心地觀經に、

心は、猿猴の如し、五欲の樹に遊びて、暫くも、往まらず。

といへる、まことに、その通りである。

孟子は、これを放心と名け、放心の求めざるべからざるを力說し、學問の道、他なし。その放心を求むるのみ。

と斷言した。亦た、その通りである。

が、放心を求むるの困難なるは、最初から、放心なきの安泰なるに如かぬ。心を放つて、これを求めるよりも、てんから、心を放たない方がよい。この心をして、少しも、物の爲めに動かさざらしむるの修養を積む。これが、最上の策である。

所謂る修養は、無我の修養である。無心の修養である。無慾の修養である。人

間、無我になり、乃至、無慾になれば、名も、利も、美人も、この心を動かすに足らぬ。何物にも留まらない。萬事萬物、風の如くに來て、風の如くに去り、些かも、煩ひとはならぬ。卽はち、不動心なるものである。

六の二一　孫子の說難

◇鶯や、御前へ出ても、同じ聲。「小林一茶」

「凡そ、說の難きは、吾れ、之れを知りて、以て說くあるの難きにあらず。又た吾が辯ずるの難きにあらず。又た、吾が、敢へて橫失して、能く、吾が意を明かにするの難きにあらず。凡そ、說の難きは、說く所の心を知りて、吾が說を以て、之れに當つるに在り。說く所、名高を爲すに出づるものなり。而して、之れに說くに、厚利を以てすれば、則はち、下節を見て、卑賤に遇せられ、必らず、棄て遠ざけらる。說く所、厚利に出づるものなり。而して

之れに說くに、名高を以てすれば、則はち、無心にして事情に遠ざかるを見て、必らず、收められず。說く所、望みは厚利を爲して、顯はに名高を爲すものなり。而して、之れに說くに、名高を以てすれば、則はち、陽に、其の身を收めて實は、之れを疎んず。若し、之れに說くに、厚利を以てすれば、則はち、陰に、其の言を用ひて、顯はに、其の身を棄つ。此れを之れ知らずんばあるべからず。」

（孫子）

× × ×

權貴の人に說くのである。下手に說いて、御機嫌を損じたが最期、何んな禍ひを受けやうも知れぬ。

雉子も、鳴かずば、打たれまい。「日本俚諺」

『鳴いて打たれる位ゐなら、寧そ、默つてゐた方がいい。』と、利巧者は考へる。が、そんな事を心配するのは、說く者に、慾があるからである。自分の爲めを思ふ私心があるからである。孫子はいふ、「凡そ、說の難きは、說く所の心を知りて、吾が說を以つて之れに當つるに在り。」と。吾等をしていはしむれば、說の難

きは、說く者の慾に在る、私心に在ると。

俳人一茶は、加賀侯に召された時、侯の氣に觸るやうな、怪氣焰を吐き散らした末に、「篤や、御前へ出ても、同じ聲。」——これでよい、これでよい。一茶、元來、無我、無慾の人であつたればこそであるのみならず、無我にして、專ら、相手の爲めを思ひ、無慾にして、些か、爲めにする所がないならば、その說が、縱し、相手の意に反しやうとも、相手は、決して、怒りなどしない。倘ほ且つ、腹を立てる相手ならば、それは、無心に落ちて來た棚の物を捉まへて、喚き立てる非常識漢である。相手にしたのが惡い。

六の二三　五竹坊無我の心持ち

◇仰向いて、分別はなし。今日の月。「五竹坊」

五竹坊琴左は、尾州の人である。俳意を廬元坊より傳はり、濃風を以て、一時

に鳴つた。一に、歸童仙と號した。

仰向いて、分別はなし。今日の月。

又た、或る時、

彼に得手あり。我に勝手あり。彼が得手を我に讓り、我が勝手を彼にあづければ、世は、たゝ、をかしくも、亦、さびしくもあらん。

と詞書して、

柿くひに、來るはからすの、道理かな。

一年、何事であつたか、師の廬元坊の勘氣を蒙つたけれど、師に對する志を變へず、篤實の聞えがあつて、間もなく、往來を許された。

その句を誦し、その事を見て、その人を想ふに、五竹坊は、無我の人であつたのである。

× × ×

無我なるかな！　無我なるかな！　人は、無我でなければならぬ。

「仰いて、分別はなし。今日の月。」——月に對しては、心中、月があるばかり、

私の分別はない。花に對しては、心中、花があるばかり、一身の利害などを考へない。君に對し、親に對し、國家に對し、同胞に對する、心中、ある所は、たゞ、對するものばかりで、我れはないといふもの、これ、無我の心持ちである。

「柿くひに、來るはからすの、道理かな。」——有我、我執の人は、自分の方にのみ、道理があるとして、得手勝手を列べ合ふ。世に、苦情の絶えないわけである。その實、道理は、何方にもある。道理は、たつた一つであらうが、一つの道理の幾分づつは、我れにもあり、彼れにもある。況して、自分を本位にして、道理のない所に道理をつけ、強ひて、理屈を捏ねるとなれば、十人に十の道理、百人に百の道理　際限なく、道理が出來る。盜人にも、三分の道理があり、柿くひに來る烏にも、道理があつて、追ふ權兵衞を無理としやう。而も、相手にある道理を認め、「我が勝手を彼にあづけ」て、浮世をかしく暮すのは、たゞ、無我の人の事である。

師の勘氣を受けて、怒らず、恨みず、洒然として、これに處し、初めの志を失はなかつたのも、その人、無我の人であつたからである。

六の二四　玄武坊自ら重んず

◇已れを屈して、富貴ならんよりは、志を抗げて、貧賤なるに若かず。「孔子」

玄武坊、村上氏、醫師を業として、江戸駒込白山下に住んだ。亦た、濃風の俳人で、自ら、これが眞隆に任じ、以て、後世に傳へんことを期した。尾張の五竹坊から、廬元坊の訃を傳へて來た時、涙、堰き敢へず、筐の一軸に向つて、百合の花、我もうつむく、外はなし。

さこそと思ひやられる。

めでたさの、誠はさびし、松の色。

此方が、無我で出れば、先方も、無我で來る。師の心が、忽ち解けて、聞もなく、往來を許されたのも、亦た、無我の德である。無我なるかな！　無我なるかな！

世の變化、流行を追ふよりは、萬古不易の俳諧に遊ぶに如かぬ。』といふのである。

或る時、或る諸侯から、

『朝夕、俳諧の話が聞きたい。尤も、若干の俸祿を當てがふから……』と、門人を以て、通じて來た。門人は、師の滿足すべきを豫想し、喜んで、取り次いだのであつたが、玄武坊は、一笑して、

『一たび、祿を受けて、その藩士になつた上は、何事を命ぜられても、辭むわけには行かない。俳諧の事は、尙更だ。今、濃の一流を後世に傳へるには、身を閑かにして、道を修めるのでなければならない。折角ながら、斷つてくれ。』と語り、請けなかつた。

『成程、當時の大導師ではある。』と、誰れ嘆ぜぬはなかつたといふ。

× × ×

已れ、已れの主となれば、外物に動かされず、能く、已れの眞を守つて、利害榮辱の外に、超然たることが出來る。これが、眞の人格である。これが、眞の自

重である。

六の二五　行燈の置き場所

◇誠なれば、明かなり。明かなれば、誠なり。「中庸」

山家から、初めて、京へ奉公に出た下女、夜になれば、行燈を灯す、といふことを知らぬ。內儀の指圖で、夕刻、火は點けたが、たゞ、手に提げて、うろうろと、臺所や座敷を持ち廻つてゐる。內儀が見て、

『何故、臺所に置かぬのぢや！』と叱ると、下女、拔からぬ顏で、

『あの、闇がりに置いても、大丈夫でございますか。』

× × ×

一切衆生、悉く、佛性を有つてゐる。天下萬人、皆、本心を具へてゐる。佛性や、本心や、常に、昭々靈々として、天日の明かなるが如くに明かなるもので

ある。以て、道を照すに足る。これに據れば、自然にして、仁義、忠孝を勤めることが出來る。中庸に、

誠なるより明かなる、これを性といふ。

とは、こゝのことである。誠は、佛性の別名、本心の異稱である。

悲しいかな、その佛性、その本心は、平生、私心、私慾の雲に蔽はれて、その光を發揮するに至らない。山出しの女中が、明かな行燈を提げながら、置き場所に困つてゐると同樣、我々も、明かな佛性、本心を持ちながら、道に迷つて、たゞうろうろと、闇雲暮しとは、何と、哀れなものではないか。

こゝに於てか、教への必要がある。教へに依つて——修養に依つて、私心、私慾の雲を拂ひ除ける必要がある。斯くて、佛性、本心をして、能く、その本來の光を發揮せしむれば、復た、道に迷ふ處はない。これ、本來の面目に還るのである。これを誠といふ、亦た、誤まらぬ。中庸に、

明かなるより誠なる、これを教へといふ。

とは、こゝの事である。

六の二六・人命幾ばくの間か

◇死は、前よりして來らず、豫ねて、後ろに迫れり。「兼好法師」

「佛、沙門に問ふ、人命、幾くの間に在る。對へて曰く、數日の間なり。佛言く子、未だ、道を知らず。

復た、一沙門に問ふ。人命、幾くの間に在る。對へて曰く、飯食の間なり。佛言く、子、未だ、道を知らず。

復た、一沙門に問ふ、人命、幾くの間に在る。對へて曰く、呼吸の間なり。佛言く、善いかな、子、道を知れり。」(四十二章經)

× × ×

人は、平生、「無常」の二字を心にかけて、曾つて忘れないのをよしとする。人命、停まらざること、山を下る水よりも過ぎたり。「涅槃經」

であり、

この日、已に過ぐ。命は、則はち、隨ひて減ず。少水の魚の如し。「出曜經」

であつて、尙ほ甚だしいものがある。山を下る水は、疾いけれど、下るに若干の時間を要しやう。少量の溜り水は、間もなく涸れるが、その間、多少の餘裕があらう、人の命は、往々、一呼吸の後に盡きる。人は、篤と、この事を合點し、時々刻々、心をこゝに置くことが肝要である。

或る時々に、思ふのではない。

念々、こゝに在つて忘れざるを、志といふ。「朱子」

とある如く、絕えず、無常を思ふのである。

斯かるもの、久しきに及べば、能く、無常に順應して、無常なるが儘に無常なるを得る。無常に逆ふ心がなくなる。常住の願ひがなくなる。こゝに至つて、何時、死の運命が巡つて來ても、笑つてこれを迎へることが出來る。死生存亡を餘事に附し、超然として、天命を樂しみ、脫然として、自然を喜び、暢氣に世を渡ることが出來る。

死生存亡をさへ、餘事に附する。利害得失が、何であらう？

毀譽褒貶が、何であらう？

それは、世外の人になるのではない。妻子を捨て、家を捨て、商賣を捨て、山林に入るのではない。世外の情を以て、世内の事に當るのである。世外の情を以て、世内の事に當つてこそ、樂に、落ちついて、世内の事を取り捌くに堪へるこれが、眞の處世法である。

六の二七　俳人一茶の怪氣焰

◇何のその、百萬石は、笹の露。「小林一茶」

こゝがまあ、終の住家か、雪五尺。

一句、以て、故郷の信州柏原へ退いた、一茶の茅屋へ、名主嘉左衞門が、遽たゞしくやつて來て、

『お前の風流が、加賀様のお耳へ入つて、御用とのお言葉ぢや。俺と一緒に、中村の御本陣迄、行つておくれ。』といふと、一茶は、苦り切つて、

『風流に御用がありますかい？』喜ぶと思ひの外なる挨拶である。嘉左衛門は、一茶の氣象、成程と氣がついて、

『いや御用とは取消、俺の間違ひぢや。實は、入懇のお招きぢやから、是非、行つて欲しい。でないと、俺か困るでの。』

『貴方を困らせるでもあるまい。ぢや、參りませう。』

『行つておくれか、あり難い。何卒、その……お世辭の一つもな……』と話しながら、兩人共々、本陣へ出頭した。

加賀侯は、直ぐ、一茶を延見して、

『好うこそ參つた。今日、召したは、餘の儀に非ず。俳諧の話が聞きたいのぢや。』

とのことである。一茶は、口の邊りに冷笑を浮べて、

俳諧の話！……然やうさ、花鳥風月、一として、俳諧ならぬはございません。

然し、風流を玩具視されてゐる貴顯方に、俳諧の話は、不向きでせう。多分、御了解にはなりますまいよ。』友だちにでもいふやうに、ぞんざいにやつて除けた。

それより、問答二三の後ち、いざお暇と、起たうとして、傍なる嘉左衛門を顧みて、

『名主殿折角の心づけを、つひ、忘れてをりました。』と笑ひながら、

鶯や、御前へ出ても、同じ聲。

の一句も留めて、さつさと退出した。

茅屋には、門人等が、首を鶴くして、一茶の歸りを待つてゐた。

『首尾は、如何でした。』と尋ねると、一茶は、禿筆を噛んで、

何のその。百萬石は、笹のつゆ。

× × ×

孟子はいつた、

大人に說くには、これを藐んずるに在り。その巍々然たるを視ること忽れ。

と、一茶の加賀侯に於けるが如き、能く、大人を藐んじたものといつてよい。

が、特に、大人を藐んずるのは、大人氣ない。相手を大人とし、權貴の人とすればこそ、特に、これを藐んじたくなるのである。寧ろ、その、大人たり、權貴たるを忘れた方がよくはないか。これを藐んずるは、これを忘れるに如かぬ。

大人たり、權貴たるを忘れ、車夫たり、馬丁たるを忘れて、單に、その「人」たるに着目し、彼れに對する心持ちを以て、此れに對し、此れに對する態度を以て、彼れに對する。相手の何人であるに論なく、常に、夷然としてゐる。常に、洒然としてゐる——それでなければならぬ。

孟子の語、一茶の言行には、この點に於て、遺憾がある。たゞ、今の世には、おべつか屋が多い。只管、富貴の人に取り入らんとして、阿諛便佞、至らざる所なく、以て、處世の策を得たものとする利巧者が、今の人の大部分を占めてゐるこれを忌はしく思ふ吾等は、一茶の硬骨に對して、遂に、尊敬の念なきを得ぬ。

根や欲。焉んぞ、剛を得ん。「孔子」

蓋し、一茶は、無慾の人であつた。

六の二八　房州邸の山鹿素行

◇死は、太山よりも重きことあり。鴻毛よりも輕きことあり。「史記」

寛文六年十月三日、山鹿素行の許へ、舊師なる大目付北條安房守から、

相尋ぬ可き御用之儀に付、早々、私宅迄參らる可く候。

といふ切紙が來た。素行は、前に、聖教要錄を著はして、漢、唐、宋、明の學を痛撃したが、程子、朱子等の宋儒に於て、最も甚だしく、道統の傳、宋に至りて、竟に泯滅す。

と迄極言し、以て、古學を主張した。程朱を誹るのは、林家を誹り、延いて、幕府の教育方針を誹るのである。安房守の所謂る、「相尋ぬべき御用之儀」とは、その事に相違はない。素行は、忽ち、覺悟を定め、「追付、參上仕る可き」旨を答へて置いて、それぞれ、その仕度をした。

先づ、夕食を濟し、行水を使ひ、立ちながら、遺書を認め、尙ほ、死罪に處せられた場合、幕府へ差し出す心組で、別に、一通を作つて懷中し、その他、五六個所への小翰を書いた。而し、老母方へ、何等、申し送る所がなかつたのは、子の情、事を知らせるに忍びなかつたのである。

素行は、當時、牛込早稻田に堂々たる邸宅を構へてゐた。程遠からぬ宗參寺には、亡父修立庵の墓がある。次いで、それへ參詣して、今生の暇を告げ、歸ると、下人を省き、若黨二人だけを召し連れて、馬上、房州邸へ向つた。なるべく。途中、神田の津輕邸の前迄來て、ふと思ひ出したのは、明四日、同邸へ行く約束のあつたことである。素行は、使ひを寄せて、

『據ろない事故の爲めに、明日は、伺ひかねます故……』と告げさせた。

斯くて、房州邸へ着くと、門前、夥しく人馬が見え、どこかへ打ち立ちさうな様子である。一見、

『はゝあ、自分が來なかつたら、押し寄せて、踏み潰さうといふのぢやな。』と領きつゝ、門を入り、玄關で、刀を下人に渡し、案内の士に、

『何か、事がござるかな？　御門前、たゞならず、お見受け申す。』と冷笑を浴せかけ、その儘、書院へ通つた。

待つ間程なく、安房守が出て、

『貴公は、要らざる書物を作られたものぢや。それ故、淺野內匠頭へお預けなされる。これから直ぐ、赤穗へ行かにやならぬ。宿へ用事があらば、何なりと、いふがよい。』といふ。すると、福島傳兵衞といふが、硯を持ち出し、素行の側へ來て、

『手前、書き留め置きまして、お傳へ申しますることはござらぬ。』

素行は、それには答へず、安房守に向つて、

『忝なく存じまする。然りながら、拙者は、常に、家を出る都度、心殘りのないやう、萬事、處理して置きまする故、只今とても、別に、申し殘すことはござりませぬ。』毅然としていひ放つた。

稍やあつて、奉行島田藤十郎が來て、別室へ入つた。安房守は、起つてこれを迎へ、これと列座の上、素行を召した。素行は、末席に平伏した。安房守は、言

葉を儼かに、

『その方事、不届きなる書物を著はせし科によつて、淺野內匠頭へお預けの旨、御老中より仰せ出された。然やう相心得よ。』と宣告した。

聞き終つた素行は、

『御意の趣き、畏まり存じ奉りまする。』と、お請けをし、且つ、

『就きましては、右の書物の何れの點が、御公儀へ對し奉り、不都合なのでござりまするか。承はりたく存じ奉りまする。』と反問した。

安房守は、何か、藤十郎と囁き合つて後ち、

『言譯もあらうかなれど、斯く仰せつけられた上は、最早、それにも及ぶまい。』と斥けた。素行は、

『然やうの御意ならば、左右、申すべきやうもござりませぬ。』とばかり、その座を退いた。

それと見た徒士目付等は、

『內匠頭殿御家來衆！　內匠頭殿御家來衆！……』と、騒がしく呼び立て、甚は

だ落ちつかぬ體に見えた。素行は、笑止に堪へなかつた。淺野家の士は、素行を受け取つて、鐵砲洲の邸へ戻つた。

この間に於ける素行の作法には、一點の遺漏がなかつたとかで、淺野家の士は、その夜、感心しながら、素行に語つた。

素行は、數日を淺野邸に送り、九日未明、愈よ、赤穗へと出發した。時に、幕府からの注意に、

『この者には、大勢、弟子、門人がある。徒黨の輩が、道中は勿論、芝、品川などで、奪ひ取らうとかゝるも知れぬ。油斷のないやうに。』とあつた。當時の素行は、弟子三千人と稱せられ、聲望の隆んなる、往々、諸侯を凌ぐの概があつた。

この注意、無理ではない。

警固の士は、爲めに、一方ならず、氣を揉んだ。素行は、それが氣の毒さに道中では、朝から午、休みから泊り迄、大小便をさへ辨じないやうにした。

斯くて、廿四日の夜、舊緣の地赤穗へ着いた。舊緣——！　素行は、先にも、承應元年から萬治三年迄、淺野長直の賓師として、赤穗に在り、赤穗には、長直を初

め、多々、舊知があつたのである。

素行は、この際の心持ちを述べて、

我等、匹夫の者に候處、一人の采幣にて、大勢を從へ申候やうに、諸人、存候事は、不仕合なる中に、少しは、武士の覺悟これあるにも罷成候哉。

といつてゐる。

× × ×

吉田松陰も、その士規七則の中に、

士の道、義より大なるはなし。

といつてゐる。義を知らない武士は、眞との武士ではない。學問もあり、才智もあり、百事、皆、人に優るものがあつても、苟くも、義に於て缺如する所があれば、他は、見るに足らぬ。

義とは、何か。それには、種々の解釋もあるが、武士道に所謂る義とは、畢竟犧牲といふことである。君を先にして、身を後にし、國を重んじて、家を輕んずるの犧牲的精神、これが、武士の魂である。

犧牲の極は、君の爲め、國の爲めに、命を捨てるに在る。斯くて、不斷、死の一字を念頭に置いて、心を練り、身を鍛へた者、これ、古への武士である。

であるから、古への武士は、死ぬことを何とも思つてゐなかつた。女々しい事未練な眞似を、死に勝るの恥ぢとして、時宜次第、忽ち、死を決し、忽ち、命を捨てた。主人から、

『何を慌てるか。』と嗜められて、慨然として、腹を切つた武士もあれば、同僚から、

『嘘でござらう?』と嗤はれて、憤然として、切腹した武士もある。君の御用を奉ずる時、他家へ使ひする時、勿論、假初に他出する時にさへ、

男子、家を出づれば、七人の敵あり。「日本俚諺」

と稱して、內心、死の覺悟を定め、決して、生還を期しなかつた。死生を超脫することが出來た斯くの如くにして、初めて、武士たるの本領を全うすることが出來たのである。

而も、死生を超脫すべき者は、武士のみではない。我々も、同樣、死生を超脫

してのみ、道義、道徳を失はず、天下、國家の大事にも當ることが出來る。例へば、房州邸に於ける山鹿素行の如くであればよい。

六の二九　妙な御祈禱

◇苦しい時の神頼み。「日本俚諺」

斉斎漢で通つた男、家内に病人が出來たけれど、これ迄、滿足に、藥禮がしてないので、醫者にかゝるわけには行かない。困つた揚句、乞食坊主を引つ張つて來て、祈禱をさせた。坊主は、或ひは、奥州の鹽竈さま、或ひは筑紫の天滿宮と遠い神々のお名を呼び上げて、

『何卒、病氣の癒りますやう。首尾よく平癒の曉は、石の鳥居、金の燈籠、何でも、彼でも、お好み次第に差し上げまする。南あ無鹽がま樣！　天滿宮樣！』と口から出任せに、喚き立てる。斉斎漢が、聞き咎めて、

『おいおい、お前の頼む神さまは、遠國の方ばかりだ。近所の神樣の方が、通じがよくて、よからうに。』といふと、坊主は拔らぬ顔で、

『ところが、近所の神樣は、貴方のけちを御存じだから、何程頼んでも、お受け取りにはなりますまいよ。』

× × ×

これを稱して、「苦しい時の神頼み。」といふ。古歌に、

祈るとも、驗しなきこそ、驗なれ。祈ることゝころに、誠なければ。

で、そんな神頼みに靈驗のないことは、誰れも、承知してゐながら、その仕業には、これが多い。

何か、困ることがあると、惜し惜し、手土産の一つも買つて行つて、言葉優しく、丁寧に、三年以來の無沙汰を詫び、手を摺り、足を摺り、頼み奉つて、

『何分、宜しく……』と出るか、事が濟んで、最早、先方を煩はす必要がなくなると、以前の無沙汰に歸るは勿論、稀に遇ふても、糞でも食へ的の顔をする。穿ける中は、拭きもし、洗ひもして、大切にするが、頤が缺けて、用をしなくなる

と、裏の塵埃捨て場へ捨てゝしまふ——恩人をこの足駄の如くに扱ふのである。不誠意といふか、人間といふか、人間の行爲、これ程惡むべきはない。

こんな風では、追つけ、交際ひ人もなくなるであらう。甚はだ利巧なやり方のやうで、その實、不利巧の骨頂である。

『何、世間は弘い。』とばかり、舊知を去つて、新知に就き、他方面へ、他方面へと向つて行く、成程、世間は廣い。けれど、然うした不誠意漢を容れる餘地は、廣い世間のどこにもない。どこへ行つても同じこと、行く先々で、愛憎をつかされるとは、さてさて、困つたお利巧殿ではある。

六の三〇 洗濯着に安んじた家康

◇士、道に志して惡衣惡食を恥づる者は未だ與に議するに足らず『孔子』

晩年駿河の府中に引退したる德川家康、侍臣某の美々しき袴を着けて出仕するのを見て大いに氣色を變へた『汝は不屆なり、戰亂漸く止みて、今勤儉を勵むべきの時、そうした驕者は何事ぞ、癡呆者め！』と散々に叱りつけて、暫くは目通りを許さなかつた。

又ある時は自分の着衣を洗濯せしめて、再びそれを用ゐやうとしたが、家康の令室が家康の前へ出て『垢つきたる衣は下々へ遣はされて、更に、新衣を召されては如何』と申したるを、家康皆まで聞かず『女の淺智惠では然か思ふならんも汝よく思へ我れ今の身に日々百疋の絹を用ゐるも差支なき事なれど、かくては、天下悉く奢を學びて國家滅亡の兆ともならん、世を治むる者の心得べきことぞ』と諄々として說き聞かせたとか

× × ×

眇たる三州岡崎の城から、身を起こして、天下を掌握したるほどの英傑家康はかくの如くして儉素を實行しつゝあつたのである。

英傑家康にあらざるも、總て人として物品を大切に扱はず、又その出來た原因をも知らずして、これを徒らに費すのは、決して人たるの道ではないのである。

古歌に、

『破れたる衣を着ても足ることを、知ればつゞれの錦なりけり。』

と、英雄とか、豪傑とかいはれる人も、最初から、そんなに偉かつたわけではない、事に觸れて發憤し、而も、永くその心を失はないで、絶えず學問し、絶え ず修養し、絶えず向上の歩を運んで、初めてその地位に達し得たのである。發憤せよ！　修養せよ！

七の一　子輿の病氣

◇得るは、時なり、失ふは、順なり。時に安んじて、順に處れば、哀樂も、入ること能はず。「莊子」

子祀、子輿、子犁、子來の四人が集まつた席で、一人が、『無を首とし、生を脊とし、死を尻とする者はあるまいが、死生存亡が、畢竟一體であることの解つた者はあるまいか、あつたら、その者を友にしたい。』といふと、何れも、顏を見合して。につこりした。四人が四人とも、そんな了簡でゐて、少しも、心に逆はなかつたのである。斯くて、四人は友だちになつた、

忽ち、子輿が、病氣に罹つた。子祀が、見舞ふと、子輿

は、

『造物者は、實に大したものでぢや。こんなにして、俺の心を拘束しやうとする佝僂の病ひで、五臟の穴は、皆な、上を向き、頤は、臍を隱し、肩は、項よりも高く、髻は、つんと天を指してをる。陰陽の不調和に因るのぢやらう。』とばかり、別に取り亂す樣子もなく、無事な顏でゐたが、稍やあつて、よろよろと、井戸端へ行き、水鏡に寫して見て、

『あゝ、造物者は、こんなにして、俺を拘束しやうとする。』と繰り返した。

子祀は、その嘆聲を捉へて、

『貴公は、それを厭ふのか。』と問うた。子輿は、

『否、厭ひはせぬ。』と打ち消し、

『若し、造物者が、この上にも、俺の體に變化を與へて、俺の左の臂を雞にしたら、俺は、時を作らう。俺の右の臂を丸き彈にしたら、小鳩を擊つて、燒き鳥にして食はう。俺の尻を輪にし、俺の精神を馬にしたら、俺は、それに乘つて、飛び廻らう。すれば、別に馬車を雇ふ必要もない。』と笑ひ、

『凡そ、生れるのは、時節ぢや。死ぬのは、理に順ふのぢや。時節に安んじて、理に順へば、哀樂はない。萬事萬端、心を煩はすに足らぬ。古人の所謂る懸解、卽はち、解脫なるものぢや、物に懸つて、自ら解くことの出來ない者、卽はち、解脫してゐない者は、物に束縛される、何ものも、自然には勝ち得ない。この病氣も、自然とあれば、仕方がない。厭ひなどはせぬよ。』と答へて、洒然としてゐた。

× × ×

死ぬも自然、生きるも自然、病むも自然、達者なのも自然、既に、自然とあるからは、その自然に從つて、すべての運命を甘受するの外はない。人は、自然の子である。子は、親の命に從はなければならぬ。人は、自然に從はなければならぬ。

この事、悲しむべきではない、自然に從ひ、すべての運命を甘受するのは、やがて、すべての運命から解脫する所以で、こゝにこそ、大安樂の處世法はある。

といふのか、親の命に從はない子は、不孝の子である。不孝の子には、天罰が

ある。自然の運命に從はない人は、不順の人である。不順の人には、苦痛がある。人間の苦痛は、自然に逆ひ、私智、私案の無理を通さうとする所から來るのである。

七の二　山鹿素行自ら警しむ

◇世の中は、あれほしかほし、ほしだらけ、笠きてくらせ、已が心に。「古歌」

『吾れ、常に、身を忘る。尤も、自ら警むべし。寒族、鄙夫にして、貴族、高客に同じからんことを思ひ、此の生を長うせんと欲して、死のこれを招くを忘れ、身を利せんと欲して、其の身を害するを忘れ、年高うして、血氣の衰ふるを忘れ志を得んと欲して、知寡く、德薄きを忘る。（山鹿素行）

× × ×

人をして、その身を忘れしむるものは、慾である。慾を制して、法外な望みを起さず、無謀な事を企てず、分を守り、命に安んじ、已れの成し得る所を勉めて已えの成し得ざる所を指し措く——これを賢者の處世法とする。

七の三　惟然坊風狂す

◇ひだるさに、なれてよく寢る、霜夜哉。「惟然坊」

惟然坊は、美濃の國關の人である。元と、富家であつたが、後ち、甚だしく貧乏した。蕉門に遊んで、「俳諧の狂者」と呼ばれた。風狂して、破れ笠、破れ簑に雨風を凌ぎつゝ、處定めず出歩き、行く行く、紀行の句があつた。江州彦根の俳人許六に與へて、

『吾子、これに貽せられよ。』といふと、許六は、その句を集めて、天狗集と名けた。句も皆、狂してゐた。

又た、沙翁の句を綴り合せ、和讃に作つて、諷ひ歩き、これを風羅念佛といつ

た。風羅は、芭蕉の別號である。

まづたのむ〳〵、椎の木もあり、夏木立。晉はあられか、檜木笠。なむあみだ〳〵。

この例で、數者あつた。

坊の娘は、名古屋の豪家へ嫁してゐた。斯く風狂して後は、音信もなくてゐたが。或る時、名古屋の町で、行き遇つた。娘は、侍女、下男などを連れてゐたが、父を見ると、

『どこにお在でした？　お懐かしい。』といつて、人目も恥ぢず、乞食ともいふべき姿の袖に取りつき、悲嘆に暮れた。坊も、流石に涙ぐんで、兩袖に、たゞ何となく、しぐれ哉。

といひ捨てゝ、何處ともなく走り過ぎた。嘗つて、千金の金あらんよりは、林下の貧に如かず。

と詞書して、

ひだるさに、なれてよく寢る、霜夜哉。

又た、

世の中は、しかじと思ふべし。金錢をたくはへて、人をめぐめる事もあらず己れを苦しましめんより、貧しうして、心にかゝる事なく、氣を養ふにはしかじ、學文して、身に行はざらんより知らずして、愚なるにはしかじ。

と詞書して、

人は知らじ、げにこの道の、ぬくめ鳥。

× × ×

黄金を有するのは、往々、汚物を有するのである。黄金は、これを有する者を傲慢、懶惰、懦弱、奢侈、鄙吝、冷酷等の不徳に陷らしめる。人は、黄金と幸福とを同一に見る。黄金に依つて買ひ得る幸福は、何か。酒色である。衣、食、住の美である。他人の阿諛である。これを幸福とすれば、下等極まる幸福である。小人は、以て、幸福としやう。君子は、却つて、以て、不幸として、これを避ける。黄金の價値が、斯くの如きに止まるならば、これを有するのは、汚物を有するのである。「千金の金あらんよりは、林下の貧に如かず。」である。「貧しう

して、心にかゝる事なく、氣を養ふにはしかじ。」である。

吾等は、産を破り、家を捨て、風狂した、惟然坊に同情する。

勿論、黄金の價値は、寧ろ、人の價値である。これを有する者の心がけ次第、玉ともなり、瓦ともなるものは、黄金である。これを人間の理想に照し、これを聖人の至適に鑑みれば、惟然坊の事は、恐らく、非難を免れないであらう。而も名利の俗物を以て、この風人を云々するのは、身知らずの骨頂である。寧ろ、彼れの爪の垢でも舐つて、少しく、世外の情を養ふには如かぬ。

七の四　惟然旅に芭蕉に伴ふ

◇我れ、日出でて起き、日入りて休む。喫茶、飧飯まで、行往坐臥、皆、俳諧なり。「惟然坊」

惟然坊、或る時、師の芭蕉に伴つて、旅寢した。木枕で、頭が痛かつたと見え

滯を巻いて寢ると、芭蕉が見て、

『惟然は、頭の奢りで、家を失つたのか。』と笑つた。

どこかに假住居の頃、引き籠つてゐると、

『今晩、どこそこに、俳諧がある。お出でなさい。』と勸めた。坊は、笑ひながら、

『自分は、日が出て起き、日が入つて休む。その間の事は、茶を飲み、飯を食ふに至る迄、行住坐臥、皆な、俳諧ぢや。特に俳諧せよとは、我點が參らぬ。』と答へて、足を擧げなかつた。

×　×　×

木枕で、頭が痛い——惟然のみではない。芭蕉を始め、多くの俳人は、好んで行脚し、然る處の自然に親しんで、吟懷をやつた。その行脚ぶりが、如何に質素であり、如何に簡略であつたは、一話、以て、想像することか出來る。

自然は、常に、簡素である。奢侈、贅澤は、人工に在つて、自然にはない。奢侈であればある程、贅澤であればある程、人は、自然に遠ざかる。自然に遠い心

持ちでゐて、自然に親しむといふ者があるならば、それは、自家撞着である。金待ちを氣取り、汽車は白切符、旅館は第一流、といふ風では、自然に親しむことは、いひ換ふれば、自然的であつたのである。惟然はいつた、「我れ、日出でて起き、日入りて休む。行住坐臥、皆、俳諧なり。」と。「皆、俳諧なり、」は、「皆、自然なり。」である。皆、自然なり。は、「皆、簡素なり。」である。獨り、行脚の時にのみ、簡素であつたわけではない。

七の五　新煙管

◇己んぬるかな。吾れ、未だ、能く、その過ちを見て、内に自ら訟むる者を見ず。「孔子」

或る人、町内でも、隣町でも、綽名して、「新煙管」といふ。息子が、その話をすると、つくづく感心して、

『新煙管とは、よく命けた。』

『何ういふ意味でせう？』

『新煙管なら、よく通る。よく通つた人、筋道の解つた人、といふことさ。』といふと、息子は、噴き出して、

『私は、然うぢやないと思ひます。』

『ぢや、何うだ？』

『詰らない人、といふのでせう。』との言葉に、親仁さん、藥鑵頭に湯氣を立て大立腹！

× × ×

人が、自分を善くいつてゐるか、惡くいつてゐるか、位の事は、大概、判りさうなものであるが、多くの人が、判らないでゐる。己惚れの爲めである。慾があるからである。慾があつては、如實に物を見ることは出來ぬ。自分を見る際に

は、殊に、慾かつく、自分は、立派なもの、と定めてしまつて、てんで、見やうともしない。斯くて、

善悪の、人を見る眼は、持ちながら、我が身の上は、烏羽玉の闇。「古歌」

闇雲暮しで日を送る者、世人の大部分が、それである。

それでは困る。人間向上の機會、方法は、主として、反省に在り、過ちを改むるに在るに在るならば、已惚れを棄て、慾を棄て、人を見る眼を己れに稱し、自分を見ること他人の如くにして——己れを客觀して、嚴しく、平生の言動を詮議し、その眞相、眞價を知るべく努めるのでなければならぬ。

七の六　貧女難陀の供養

◇長者の萬燈より、貧女の一燈。「日本俚諺」

「舍衛國に貧女あり、難陀と稱す。孤獨にして、食を乞うて、自ら活く。時に、

諸ろの國王、大臣、長者等の、佛及び幾僧に供養するを見て、自ら思へらく、我れ、何の罪ありてか、斯かる貧賤の家に生れ、此の福田に供養する能はざると。自ら悔み咎めつゝ、一日の間、施しを乞うて、僅かに一錢を得たり。

難陀、卽はち、油家に至りて、油を求む。油家問ふ、一錢の油は、少量にして用ふるに足らず。之れを以て、何をか爲さんとすると。難陀、具さに、願ふ所を語る。油の主、之れを愍れみ、油を倍して與ふ。

難陀、大に喜び、持ちて祇園精舍に詣り、世尊に奉りて、自ら願つて曰く、我れ、今、此の小燈を以て、佛に供養す。願はくば、此の功德を以て、來世には明かなる智惠を得て、以て、一切衆生の闇を除き滅するを得んと。此の誓ひを作し了り、佛を禮して去れり。

中夜を過ぎて後ち、諸ろの燈明、悉く滅して、唯だ此の燈のみ、獨り消えず目犍連、三度、之れを消さんとして、遂に消えず。佛、之れを見て曰く。目犍連彼の女人、大菩提を以て供ふるが故に、四大海水を以て、之れを消す。永く、消ゆることなかるべし。」（賢愚經）

× × ×

諺に、「長者の萬燈より、貧女の一燈。」とは、この事である。供養、施物の徳は志の所詮に在つて、物の多少には關係せぬ。孔子も、

禮といひ、禮といふ。玉帛をいはんや。

といつてゐる。志を措いて、專ら、物に重きを置く今の弊は、矯めなければならぬ。

七の七　内藤平左衞門の隱徳

◇陰徳あれば、必らず、陽報あり。「烈女傳」

昔し、關東の習ひに、大勢、子を持つた貧民は、後に生れた子を殺したものでこれを「間曳く」といつた。生活に困るからで、その間、恕すべき理れがないではないが、不都合なは、貧の然迄甚しくない者すら、この慘事を敢へてした事

である。

時に、奥州白川の附近、須加川といふに、内藤平左衞門といふ豪農があつた。これを歎いて、若し、間曳かうとする者があると、養育費を與へて救助し、『米の厭い處ちやから、多分の費しではない。』といつて、特に、苦勞ともしなかつた。

この人、篤實無類で、且つ、學問を好んだ。單に、この一事のみではなく。人を救ひ、道に橋を造り、慈悲を行ふことが多かつたので、領主松平侯も、これを賞して、苗字、帶刀を許され、士分の待遇を與へられた。死ぬ迄、枕邊に孝經を置き、遺言して、子々孫々に至つて、永く、諸人救濟の業を守るべきを、命じた。その子、その孫、皆、よく、遺命を奉じて失はず、而も、引き續いて、篤實の人であつた。

こゝに滑稽を極めたのは、或る僧、内藤氏の慈心を聞くと、寺に門を建てるに就いて、その施財を求めた。氏は、笑ひながら、

『私は、人の困窮を見かねて、救ふのぢや。寺に門がないとて、何の苦しうござ

るまい。』と答へ、僧の求めに應じなかつた。

× × ×

全國、どこへ行つても、豪農はある。金持ちはある。傲然、村民の上にゐて、而も、村の爲めにも、人の爲めにも、何等、盡す御なく、たゞた〻、小作虐め位ゐを事としてゐる。どこに、豪農たる所以があらう？　どこに、金持ちたる所以があらう？　近來、各地に小作爭議が頻發して、彼等を苦しめてゐるが、固はといへば、彼等の不德に在るのである。話の平左衞門に鑑みるがよい。

廣い世の中、稀れには、神社、佛閣、學校、青年團、道路、橋梁などに、寄附をする金持ちもあるけれど、平左衞門のやうに、慈心があつての事ではなく、大部分、名聞の爲めである。名を思はず、利を思はず、一片の慈心、忍ぶに忍ばれずして、人の困窮を救ふ——これでこそ、善である。德である。德は、常に、隱德である。隱德といつて、强ひて德を隱すには當らぬ。名を思はずして施す德が、卽ち、隱德である。慈心を以てした內藤氏は、寺の門を措いて、貧民を救つた。名の爲めにする今の金持ちは、貧民を顧み

ないで、寺には寄附する。その心持に、雲泥の差のあることを看取せよ。

されば、今の金持ちは、金持ちたるの本分を盡してゐない。金を持つても、必らずしも、名譽ではない。持つた金を、世の爲め、人の爲めに、適宜に使用してこそ、その金持ちに名譽がある。

名譽は、德の報酬である。「シセロ」

とは、こゝの事である。何等の德なくして、たゞ、金を持つことを名譽とし、傲然、他人の上にをる今の金持ちは、横着に過ぎる、根性が太過ぎる。

七の八　子路石門に宿す

◇その不可なるを知りて、これを爲す者か。「論談」

孔子の門人子路、或る時、石門といふ處に一宿した。晨門、卽ち、そこの門を守る者が、

『どこから來られた。』と問うた。子路は、『孔氏から來ました。』と答へた。晨門は、孔子の名を知つてゐて、『あの、道の行はれないことを知りながら、尙ほ、道を行はうとする人ぢやな？』といつて、それとなく、孔子を譏つた。蓋し、この晨門は、世を遁れた賢人で、所謂る、隱者の一人であつたのである。

× × ×

「その不可なるを知りて、これを爲す」のは、天命を知らないのではあるまいか。孔子自身も、子路をして、丈人にいはせてゐる、

君子の仕ふるは、その義を行はんとなり。道の行はれざるは、已に、これを知れり。

と。これ、自然に逆ふのではあるまいか——吾等は、久しく、こゝに疑問があつた。

が、聖人の聖人たる所以は、天然を知るに在る。聖人、決して、自然に逆ふものではない。

天命や、自然や、それは、已むを得ないものである。事の已むを得ない所に從ふのが、天命、自然に從ふのである。佐藤一齋の言志錄に、

雲烟は、已むを得ざるに聚まる。風雨は、已むを得ざるに震ふ。これ、以て、至誠の作用を觀るべし。

至誠は、事の已むを得ない所、卽はち、天命、自然に從ふの謂ひである。聖人の心、この外にはない。

孔子が、席、煖なるに暇あらずして、天下を周遊したのは、救世の至情、已むを得ない所に從つたのである。君臣の義を盡し、天下の爲めに、一たび、道を行はんとしたので、その心たる、雲烟の聚まり、乃至、雷霆の震ふが如くに、已むを得なかつたのである。これを至誠と見てもよい。畢竟、天命、自然に從ふの外他意はなかつたのである。

天命に從つたのである。自然に從つたのである。仕へを求めて、而も、妄りには求めなかつた。仕ふべくして仕へ、仕ふべからずして仕へない。留まるべくしてはない。

て留まり、去るべくして去る。所謂る、

可もなく、不可もなし」「孔子」

で、些か、無理を用ひなかつた。少しも、私智を弄しなかつた。仕ふべくして仕へないのは、無理である。乃至、去るべくして去らないのは、私智である。已むを得ない所に從はないので、それこそ、天命に背き、自然に反する。孔子は、それをしなかつた。

道の行はれざるを知つて、尙ほ且つ、道を行はんとし、「その不可なるを知りてこれを爲す」といへば、成程、天命を知らず、自然に逆ふことのやうに聞えぬではない。けれどその間、多少の餘地があつて、道を「容易に」行はれないことを知つた迄で、或ひは、行はるべきを思つたのに相違はない。事の「大部分」不可なるを見切つたものの、「若干」可なるを認めたものと想像される。

天命、自然は、元と、人智の及ばない所である。人間を以て、計ることは出來ぬ。

死生、命あり。」「孔子」

であるが、その天命の計られないものである限り、人は、死に至る迄、養生し服藥しなければならぬ。早い所で見切りをつけ、

『天命、仕方がない。』とばかり、藥も服まずに、死を待つのは、『眞に、』天命を知る者の事ではない。孟子も、

命を知る者は、巖牆の下に立たず。

といつてゐる。人力の及ぶだけは、注意を加へ、努力を試み、それでも行かないなら、それが、卽ち、天命である。道が行はれるか、行はれないか、可か、不可か、といふことは、自然である。事、天命、自然に屬して、人間には判らない。行はれない道を、無理から行はうとし、不可を、强ひて可としやうとするのは、天命、自然に從はないのであるが、一概に、行はれないと見限り、不可と定めてしまふのも、天命、自然を知らないのである。

であるから、寧ろ、天命の事は、自然に任せ、自然の事は、自然に任せて、道の行はれる、行はれない、事の可、不可などには干渉せず、たゞ、至情の已むを得ない所に從ひ、理の當然を行つて、成否を問はないのをよしとする。孔子の意

や、亦た、こゝに在つたので、現に、
人事を盡して、天命を俟つ。
とかいつてゐる。孔子は、どこどこ迄も、事の已むを得ない所に從つたのである。天命、自然に從つたのである。雲烟の聚まる如く、風雨の洶る〻如く、雷霆の震の如くに行動したのである。孔子を譏つて、「その不可なる知りて、これを爲す者かと、譏つた晨門は、一見、天命を知るに似て、實は、天命を知らなかつたのである。

七の九　釋尊と妻の布施

◇一を種うれば、十を生じ、十を種うれば、百を生ず。「雜譬喩經」

釋尊が、或る家の門に立つて、食を乞はれると、その家の妻、快く、飯を佛鉢の中に入れ、禮をした。釋尊は、それを受けて、

『一を種うれば、十を生じ、十を種うれば、百を生じ、百を種うれば、千を生じ千を種うれば、萬を生じ、萬を種うれば、億を生じて、よく、佛道を得られやう』といはれた。
けれど、その夫は、信じないで、
『僅かに一鉢の飯を施して、そんな福が得られるものか。』と笑つた。佛は、
『否！』と打ち消して、
『お前は、彼の尼拘陀樹を見たか。高く茂ること四五里、年毎に、數萬斛の實を落す。而も、その核は、芥子の如くぢや。無知の土地さへ、然うした報力を持つてをる。況して、人は、有情のものではないか。歡喜して、佛に一鉢の飯を奉るその福は、到底、計られるものではない。』と教へられた。
こゝに於て、夫妻共、智慧が開けて、須陀恒道を得た。

× × ×

一善、小と雖も、善は、これ、小ではない。實に、人間の一大事である。勉めなければならぬ。一惡、小と雖も、惡は、これ、小ではない。亦た、人間の一大

事である。戒めなければならぬ。

七の一〇　法を念ずるの徳

◇造次にも、こゝに於てし、顚沛にも、こゝに於てす。「論語」

◇造次にも、こゝに於てし、顚沛にも、こゝに於てす。「論語」

「汝等、身を正しうし、意を正しうして、結跏趺坐して、他の想なく、專ら、法を念ぜよ。正法は、諸ろの欲愛を除き、塵勞を除く。渇愛の心、永く起らず。欲をして無欲ならしめ、諸ろの煩惱の結縛と病とを離れしむ。」（増一阿言經）

× × ×

これ、孔子が、

苟くも、仁に志せば、惡しきことなし。

といつたのと、正に、同じ心である。「志」は平たくいへば、「心がけ」である。平生、仁を心がけてゐれば、縱し、仁人にはなり得ない迄も、不仁な事、例へば

人を虐め苦しめるやうな事をしない。絶えず、正法を心がけてゐれば、例令、正法を悟り、佛智を開くには至らない迄も、諸ろ欲愛、塵勞を除く以下、種々の利益がある。

而も、志は、萬事の本である。人間、志がなくては、何事も成されない。仁を心がけるのは、仁人なるの第一歩である。正法を心がけるのは、正法を得るの初程である。

それは、絶えず心がけるのでなければならぬ。一時の感激によつて、一時だけ心がけるのは、眞の志ではない。朱子が、

こゝに志せば、念々、こゝに在りて、これを爲して厭はず。

といつてゐる如く、念々刻々、絶えず心がけ、「造次にも、こゝに於てし、顚沛にも、こゝに於てす。」といふ風でなければならぬ。斯くて、久しきに及べば、人と仁、人と正法との間に、親みが生じて來る。そして、その仁、その正法、やがて、その人のものとなる。

七の二　熊澤蕃山吉野山に入る

◇夫子の道は、忠恕のみ。「曾子」

熊澤蕃山は、初め、備前侯池田新太郎少將光政に仕へ、寵任、最も敦く、言、聽かれ、計、用ひらるゝの際に於て、致仕して、京師に京居した。事を共にする者と際があつて、自ら安んじ得なかつたのである。

京に在ること十年、諸公卿、爭つてこれを師とし、道を問うた。名聲の隆んなるに連れて、誹謗も多く、殊に、所司代牧野某は、蕃山の才學を忌み、世說を楯に、これを陷れやうとした。蕃山は、長く留まるの不可なるを知つて、一時、大和の吉野山に入り、自然を友に、歌を詠じ、琵琶を彈じて、悠々たる閑日月を送つた。

時に、深草の元政上人へ寄せた消息の中に、

この春は、吉野の山の、山人と、なりてこそ知れ花の色香を。

在京中、蕃山は、元政と親交があつて、時々、伶人三四人、外に、小倉少將といふを伴つて、これを訪ひ、草山の稱心庵で、音樂を催した。蕃山が、琵琶を彈じると、少將が、琴を奏し、元政が、和歌を詠むの例であつた。

× × ×

吉野の山人となつてこそ、始めて、吉野の花の色香に判る。人を評する者、自分をその人の地に置くのでなければ、その心は判らない。世間の風習と、あり來りの道德と、空寂な自分の頭位にも尺度にして、左や右、いつて見た所で、その評、中るものではない。及び腰の判斷は、所詮、駄目である。

「恕」は、思ひやりの意である。思ひやりとは、身を他人の地に置くことである。人を評するにも、この思ひやり、この恕を缺いてはならぬ。

□世の中に敵といふは外になし
人をゆるさぬ心こそそれ。

七の二二　荻生徂徠大學を自習す

◇書を讀むには、精覈ならんことを要す。多きを要せず。「室鳩巣」

荻生徂徠の父を方庵といふ。醫を以て幕府に仕へ、寶寶中、事に坐して、上總に竄せられた。徂徠、時に十四、父に從つて、共に往つた。二十五歳、赦されて江戸に歸る迄、中間十有三年、日々、田夫野老と偶處し、師もなく友もなくて、而も、一代の大儒となり得たのは、主として、自學自習に依るといふ。

所謂る自學も、多くの書を學んだのではなく、たつた一部の大學諺解を讀んだに過ぎぬ。父の篋中、この書を得ると、日々讀み、夜に思ひ　遂に、明德、至善格物、致知等の理を會得することが出來た。轉じて、他の書に對すると、講說を俟たずして、この意を了し、果ては、普ねく群書に通ずるを得たとは、彼れ自らの語る所である。

× × ×

賢明なる讀書家は、淺く、廣く讀まないで、淺く、狹く、深く讀む。廣く讀めば、結果に於て、曾つて讀まないと同じことになる。狹く、深く讀めば、その利益たる、廣く讀むと變りがない。

といふのが、書物の多き、千種、萬種のみではない。說く所の理は、大抵、數言に盡きる。至誠、以て、仁義を行ふに始まつて、天命に安んずるに至極するものは、儒教の要である。盧無を心とし、自然に從ふべし、とするものは、老莊の要である。一切諸法、皆、眞如の緣起に成るとし、差別卽平等、平等卽差別といふを以て、萬事を解し去るものは、佛教の要である。他の數千萬言は、これを縱說橫說するに過ぐ。若し、能く、これ等の要を得ることが出來るならば、他の數千言を解くのは殆んど、庖丁の牛を解くが如くである。何の雜作もない。

而も、それ等の要は、これを明かにすること、一冊の書、一部の經で足りる。例へば、荻生徂徠が、たゞ一の大學諺解に依つて、自學自習し、普ねく群書に通じ得た如き、正にそれである。

こゝに至つて、一冊の書は、一冊の書ではない。深く讀まれた一冊の書は、價値に於て、百千萬卷にも相當する。見榮や商賣に學ぶ者は知らぬ。道を知り、心を養ふ爲めの讀書ならば、多くを讀むのは、無用の勞である。「狹く深く」といふもの、讀書の第一箴でなければならぬ。

七の一三　村人牛を偸み食ふ

◇生療法、大疵の因「日本俚語」

村中、總がかりで、牛を偸み、食つてしまつた。役人が來て、
『その方たちは、この村の者か。』と訊くと、
『こゝには、村はありません。』との答へ、
『この村には、池がある。その池の畔りで、牛を食つたらう?』
『池はありません。』

『池の側に、木があらう?』
『木はありません。』
『牛は、村の東の方で盜んだか。』
『東の方はありません。』
『盜んだのは、正午頃だらう?』
「正午はありません。』と、一切「ありません」盡し、ないない盡しで返答する
と、役人は、大喝一聲、
『村もなく、池もなく、木もないとは、何だ? どこの國にも、東の方もなく、正午もない處があるか。この嘘吐き奴!』と叱りつけた。村の者たちは、ぐつと詰つて、白狀に及んだ。

× × ×

萬物皆空、一切を無とした者、支那には、老子があり、印度には、釋迦がある
それはよい。慾ひに、禪などをやつた者が、善もない、惡もない。何をしても構はない、の了簡を起し、氣儘放埒を働くのは、話の牛盜人と一般の困りものであ

る。

七の一四　太田錦城抑字の誡め

◇約を以てこれを失ふ者は鮮し。「孔子」

「飲食も、なるべきだけは、薄くすべし。房室も、なるべきだけは、少くすべし。是れ、身を全うするの法なり。衣服も、なるべきだけは、素素なるべし。器用も、なるべきだけは、儉朴となるべし。宮室も、なるべきだけは、卑陋なるべし。是れ家を守るの法なり。奢侈の念を抑へ制すると、放縦の欲を抑へ制すると、天下・國家を治むる人人も、一身を守る者も、抑の一字、至近切要の學なり。」「太田錦城」

× × ×

孔子は、「約」といつた。過ぎやうとするのを抑へて、約やにするので、抑も、約も、同じことである。老子には、

持して、これを盈すは、その已むに如かず。

の一句がある。

天道は、盈つることを嫌ふ。況んや、過ぎるに於てをや。過ぎれば、必ず、失敗する。いひ過ぎ、やり過ぎ、出過ぎ、慾張り過ぎ、飲み過ぎ、遊び過ぎの類皆、失敗の因である。宜しく、これを抑へ、これを約やかにして、家を保ち、身を全うすべきである。

七の一五　性惠法親王と池の蛙

◇人は見かげによらぬもの。「日本俚諺」

龜山天皇の皇子性惠法親王、綾小路宮と申される方が、或る時、その小坂殿の上に、繩を引かれた。吉田の兼好、それを見て、後德大寺實定の例——といふの

は、兼行が、徒然草に、

後徳大寺大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、鳶のゐたらん、何かは、苦しかるべき。この殿のみ心、さばかりにそして、その後は、參らざりける……

と記してゐるもの、それである——を思ひ出して、稍や少しく、遺憾の折柄、『お屋根に、澤山、鴉がゐて、池の蛙を捕つて食ふ。それを悲しまれての事でござる。』といふ者があつた。兼行は、已れの誤解を悔ひて、『それは、貴きお心がけぢや。』と、深く、感じ入つた。

× × ×

「人は、見かけによらぬもの。」である。惡人に似た善人もあれば、善人に似た惡人もある。古人の所謂る、

大奸は、忠に似たり。

で、大野九郎兵衛のやうな奸物が、忠を以て進められ、大石內藏助の如き義人が、却つて、疎斥せらるゝ例は、古來、甚はだ、少くない。愼しむべきは、見かけを以て、人を評することである。

中庸に、

十目の視る所、十手の指す所、それ、嚴なるかな。

の一句がある。人には、眼もあり、鼻もある。十人が十人、見て惡事とし、惡人とする所は、先づ以て惡事に相違ないが、これにも注意を要する一事がある。

善にまれ、惡にまれ、人が一つの、行爲に出る、その動機は、決して、簡單なものではない。その人の天性、性癖、氣質、體質、遺傳、閱歷、修養の程度、理想、信仰、趣味、主義、周圍の事情、境遇、その他、その人に屬する萬多の事項が、相集まつて動機を成し、その人をして、その行爲に成るべく餘儀なくせしむるので、如何なる惡人の、如何なる惡事にも、必らず、怨すべき理由がある。大まかな道德の規則を以てして、一概に律し得るものではない。道德の規則は、常に、大まかなものである。概括的なものである。これを適用して、實際の行爲を裁斷するには、餘程の酌酌を加へなければならぬ。杓子定規に決めて、かゝれば、

飛んだ間違を惹き起す。十目の視、十手の指す悪事を評するにも、この邊の用意があつてのみ、その評する所に、誤りなきを得るのである。

我々は、左右、不用意に人を評する。その人の天性、乃至、閲歴に迄、充分の觀察を加へ、さて後ち、これを評するのではなく、多くは、行爲の末のみを見て、輕々しく、判斷を加へる。

『他人の事だ、それ迄の觀察は、屆かない。』といふか、然らば、批評を見合せた方がよい。論語に、

子貢、人を方ぶ。

とあつて、才人の常、子貢は、好んで、人物を比方し、その長短を較べた。すると、孔子は、

『子貢は偉い。自分などは、自ら修養するのに忙しくて、なかなか、人を評する暇がない。』と皮肉られた、との事が見えてゐる、人を評するのは、宜しくない。「人は、見かけによらぬもの。」これを評して、首肯に中ることは、至難の中の至難である。寧ろ、口を噤むに如かぬ。

少くも、人を評して、酷に失するのは、寛に失するに如かぬ。

七の一六　大久保彦左衞門とうは狐

◇虎穴に入らずんば、虎子を得ず。「斑超」

昔し、駿府の城に、うは狐といひ傳へる、不思議な狐がゐた。手拭を與へるとそれを冠つて踊る。而も、形は見えないで、たゞ、手拭が、空に飜轉するばかりそれは、餘程の奇觀だつたので、見る人毎に、興がつた。

人が、手拭を與へる時、受け取る形は、見えないけれど、手拭を持つた手を、何やら、物が磨つて通るやうに覺えて、その儘、取つて行く。若い者たちが、故意と、渡すまいとして、何んなに固く持つてゐても、必らず、取らずに措かないといふので、城中では、大評判をしてゐるのを、大久保彦左衞門が聞くと、『俺なら、取られはせぬ。』と、手拭を持つて出て、

『さあ、これを取らぬか。』といふと、忽ち、空中に聲があつて、
『さてさて、無分別な人よ。怖いこと！　怖いこと！』とばかり、逃げ去つた。
彦左衛門は、手に物が觸つたら、手も一緒に、切つて落さう、と思つてゐた。その心持ちが、うは狐に通じたものとか。

× × ×

好んで危地に投ずるのは、避くべき事である。方法を辨へず、手段を考へないで、輕卒に、危險の敵と戰ふのは、所謂る、暴虎馮河の勇なるもので、聖人の戒しむる所である。けれどもその危險が、避くべからざるものであり、且つ、これと戰ふ方法、手段の、既に、決定せられた上は、須らく、驀然と進前すべきである。死生、利害を顧みて、躊躇し、狐疑し、逡巡するのは、啻に、功を成す所以でないのみならず。危險の敵をして、益す、不利益がある。反對に、危險ならしめ、優勢ならしむるの斷じて行へば、鬼神も避く。「孝斯」

である。

山川の、末に流るゝ、とちからも、みを捨てゝこそ、浮ぶ瀬もあれ。「古歌」

である。晋書に所謂る、

死中に生を求む。

で、死生、利害を餘事に附して、驀進する所に、却つて、幾多の勝算があるのである。

といふのが、死生や利害に心が留れば、それだけ、勇氣を殺がれなければならぬ。又た、爲めに束縛せられて、縱橫自在なるを得ぬ。機に臨み、變に應じて、適宜の措置を取ることが出來ぬ。斯くて、失敗に終るのは、當然の歸結である。

七の一七　禿頭の治療法

◇尺蠖の屈するは、以て、伸ぶるを求むるなり。龍蛇の蟄するは、以て、身を存するなり。「易經」

或る男、頭が、すつかり、禿げてしまつて、一本の毛もない。冬は寒さに苦しみ、夏は、暑さに苦しみ、年中、苦しみ通しでゐたが、不圖、何んな難病でも癒す、といふ名醫の名を聞いて、早速、診察を受けに行つた。醫者は、つくりと、禿頭を撫でて見て、

『はゝあ、これぢや、お困りだらう。然し、わけなく癒る。』

『癒りませうか。』

『癒る。大丈夫だ。』

『餘程、長くかゝりませうか。』

『否、直ぐぢや。これを癒すには、飲み藥も塗り藥りも要らぬ。』

『藥が要らない？……へゝえ。』と、患者が驚いてゐる中に、醫者は、奥から、頭巾と日傘を出して來て、

『冬は、これをお冠り！　夏は、これをお翳し！』

× × ×

人は、境遇に順應しなければならぬ。境遇に順應してのみ、能く、生存を全くすることが出來る。尺蠖は屈し、龍蛇は蟄する。境遇に順應するのである。蟲類、魚類の或るものは、その周圍の色に適合する如くに、種々に變色する機能を具へ、それに依つて、他動物の危害から免れる。無智の動物すら、境遇に順應することを知つてゐるのに、人にこの理が解らぬとあつては、「萬物の靈長」の呼號にも恥づかしい。

冬は、頭巾を冠り、夏は、日傘を翳す——これ庸に、

富貴に素しては、富貴に行ふ。貧賤に素しては、貧賤に行ふ。

とあるのも、亦た、境遇に順應するの意である。金持ちになつたら、金持ちらしく、隨分、世間の公益に盡し、他人の困窮を救ふがよい。これ、「富貴に素して は、富貴に行ふ」のである。貧乏したら、勤儉の二字をモツトーとして、精々、縮こまつて暮すがよい。これ、「貧賤に素しては、貧賤に行ふ」のである。

所が、世間の實狀、富貴に素して、富貴に行はず、却つて、貧賤に行ふ金持ち卽はち、貪慾漢、吝嗇漢が多いと同時に、貧賤に素して、貧賤に行はず、却つて

富貴に行ふ。貧乏人、卽はち、見榮張り屋が、亦た多い。彼れや、惡むべく、此れも哀れむべきである。此れも、まことに、哀れむべしである。大火事に燒け出され、無一物の身になつても縮むことも嫌ひ、『これ迄、日本橋のどん眞ん中に住んで、堂々とやつてたんだ。世間の手前、今更、場末へ引込まれるものか。』といふ、見榮張りから、餘計な苦勞をし、無理な算段、ひど工面をして、外見だけは、左に右、昔に引き還す。けれど、それには無理がしてある。その無理から、破綻を生じて、二進も、三進も行かなくなり、とい、尻に帆かけて、夜逃げをするが、落ちとなる。これを稱して、見榮の張り損ひといふ。世間、見榮を張り損はない見榮張り屋のないことを思へば、忘れても張るまじきもの、それは、見榮である。

見榮を張るのは、境遇に順應しないのである。境遇に順應しないのは、自然に背くのである。自然に背くのは、天命に逆ふのである。天命に從つて、惡い筈はなく、天命に逆つて、好い筈はない。伸びるも天命、縮むも天命、と知つて、己れの境遇に順應するのが、能く、生存を遂ぐる所以で、卽はち、處世法の最も賢明なるものである。

七の一八　布の一袋

◇火宅とも、知らで火宅に、ふらめくは。直ぐに自在の、鑵子なりけり。「土肥二三」

「器は、入る、物をして、己れが方圓に從はしめんとし、袋は、入る、物に從つて、方圓を必とせず、實なる時は、肩に餘り、虛なる時は、疊まれて、懷に隱る虛實の自在を知る布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。「横井也尚」

× × ×

重ねていふ、人は、境遇に順應しなければならぬ。伸ぶべくして伸び、縮むべくして縮む。圓かるべくして、圓くなり、四角かるべくして、四角になる。肩に餘るべくして、肩に餘り、懷ろに隱るべくして、懷ろに隱れる。大小自在、方圓

自在、伸縮自在、入る物の儘に身を成して、少しも、拘泥する所のない、布の一袋の如くに、境遇次第の世を渡るのでなければ、安樂は、望まれない。年中、苦しんでばかりゐなければならぬ。

が、「境遇次第」といふこと、談、甚はだ、容易でない。何人も、境遇に逆つて無理な事ばかりをする。伸ぶべくして縮んで、貪慾に流れたり、縮むべくして伸びて、見榮張つたりして樂な世界を、我れが苦しいものにするとは、一體、何うした了簡か、人の心持ち位る、不可解なものはない。

「境遇次第」は、貧富に就いてのみの事ではない。死すべくして死し、生くべくして生きるのも、境遇次第である。利すべくして利し、害はるべくして害はれるのも、境遇次第である。進むべくして進み、退くべくして退く、出づべくして出で處るべくして處る。泣くべくして、泣き。笑ふべくして笑ふ。いふべくしていひ、默すべくして默する。皆、境遇次第である。すべてが、境遇次第に行つて、こゝに安樂世界がある。

人の境遇は、刻々に變る。佛者の所謂る、「諸行無常」である。境遇次第——境遇に順應するのは、無常に順應するのである。諸行の無常なるが儘に、この身、この心を打ち任せて、一切、私案を用ひないのである。

孔子は、河の上りに立つて、

逝くものは、斯くの如きか。晝夜を捨てず。

と嘆息した。晝夜を捨てずに流れる水は、その流れに打ち任せてしまへば、船と水と、常に、同一の關係に在つて、流水、死水、撰ぶ所がない。動か、靜に對する名であることは、アインシュタインを俟たぬ。動と動とが、同じ方向に進行すれば、猶ほ靜の如くである。それと同樣、無常に順應して、無常はない。

釋尊が、四諦の第一に、苦諦を置き、苦諦の實體か、無常と見て、切りに、

諸行無常、是生滅法。「涅槃經」

（諸行の無常なるは、是れ、生滅の法なり。）

の理を說かれたのも、「無常を悲しめよ。」との趣意ではなくて、「無常に順應せよ。」との心であつたのである。無常に順應して、復た、無常なく、復た、生滅な

く、無常、一轉、常住となる。無常の世は、やがて、常住の極樂世界である。

であるから、涅槃經には、右に續けて、

生滅滅已、寂滅爲樂。

（生滅、滅し已りて、寂滅を樂と爲す。）

と見えてゐる。

果して然らば、極樂、遠くはない。無常に順應する處、そこに、極樂がある。

唯心の彌陀、己身の淨土。

とは、この事である。而も、無常に順應するのは、取りも直さず、境遇に順應するのである。吾等の所謂る、境遇次第であるに、境遇次第は、難かしい。何故、難かしいか。畢竟、物事に執着するからである。無我、無心、譬へば、布の一袋の如くにしてこそ、大きくもなれば、小さくもなる、圓くもなれば、角にもなる、伸びもすれば、縮みもするといふ、境遇次第の世渡りが出來るのである。

將た、自在の鑵子が、火宅にふらめいて、火宅と知らず、暢氣さうに見えるのも、無我、無心のお蔭である。

人は、返す返す、境遇に順應しなければならぬは、それには、先づ以て、無我無心、物事に執着しない修養を積む必要がある。多くの人が、孔子の名を聞いて、少くも、仁とか、道とか、天命とかいふものに、執着した人のやうに想像するのは、大間違いの骨頂で、論語に、

子、田を絕つ。意母く、必母く、固母く、我母し。

とあるのを見ても、その超脫ぶりが、思ひやられる。何事、何物にも執着しなかつたればこそ、如何なる境遇にも順應し、天命に安んじて、一生涯を大安樂に終ることが出來たのである。

七の一九　仁齊の雅量

◇世の人の、じやけんを抜いて、かいるとも、
我がれうけんの、鞘に收めよ。　「古歌」

大高坂芝山が、適從錄を著はして、嚴しく、仁齋を譏ると、第子の一人は、その書を示して、腹立たしげに、

『先生、これの辯をお作りなさい。』と勸めた。仁齋は、笑つて、答へなかつた。

弟子は、もどかしがつて、

『人が、物を著はして、勝手に、自分を譏るのに、苟くも、言葉の塞がらない限り、默つてゐる法はありますまい。先生が、不問にお附しなさるなら、手前が代つて、大に反駁してやりませう。』と迫つた、

こゝに於て、仁齋は、始めて、口を開いた。

聖人の語にも、

君子は、爭ふ所なし。

と見えてをる。彼れの說が是で、我れの說が非なら、彼れは、我れの益友ぢやし、我れの說が是で、彼れの說が非なら、彼れも、他日、學問が進んで、その非を悟るであらう。凡そ、學問の要は、虛心平氣、一途に、己れの道德を磨くに在る。彼れを譏り、我れを立てゝ、左右の辯を費すのは、用のないことぢや。よくよく、

心得たがよい。』との言葉に、弟子の怒りもどこへやら、今更ならぬ仁齋の雅量に推服した。

× × ×

譏られて、眞つ赤になり、賞められて、有頂天になるのは、人言に動かされ、相手の支配下に入るので、卽ち、自ら侮るのである。古人の所謂る、

自ら侮つて、後ち人、これを侮る。

で、そんな風では、譏られても、仕方があるまい。

人は、自ら重んずるとは、傲慢の謂ひではない。自ら重んずるとは、心も動かさず、己れの眞を守つて利害得失、毀譽褒貶の類、凡そ外物の爲めに、失はないのが、自ら重んずるのである。所謂る雅量も、こゝから生じて來る。

□學問は人たる道を知る爲めぞ
鼻にかくるな鼻が折れるに

七の二〇　仁齋夷然たり

◇學問は、當に、勝心を以て大戒と爲すべし。「伊藤仁齋」

後德大寺卿は、學問が好きで、時々は、京都の諸名儒を集めて討論させ、以てその定說を聽かうとした。

時に、仁齋は、まだ壯年で、やはり、召されてその席に列なつた。學者等は、最初の中こそ、聲を和らげ、氣を下した、靜かに論じゐるが、追々進んで、議論が合はなくなると、互ひに、自說を固執して、口を尖らし、泡を吹き立て、雞の蹴合ひの如く、犬の噛み合ひの如くに、躍鬼となつて喧嘩する、といふ風であつた。けれど、仁齋たゞ一人は、始から、終り迄、夷然として、虛心坦懷を失はなかつたので、滿座の者も、結局、仁齋の說に歸服した。

× × ×

眞理は、公平無私のものである。眞理に、私はない、我れはない。であるから、眞理の闡明を以て任とする學者は、須らく、無私、無我の心持ちで、學問の事に從ふべきである。人と議論して、已れの非を通さうとするのは、無私ではない。無我ではない。人に勝たうとするのは、無我ではない。碁を打つ者は、

棋前に人なし。

といふのを誡めとする。盤の前に相手があると思ふと、つひ、勝たうとして、無理な手を打ち、その無理から、破綻を生じて、とゞ、負けとなる。たゞ、筋をうてばよい。至當な所に石を下せばよい。學者も、相手を見ず、勝たうとせず、たゞたゞ、眞理に眼をつけ、眞理の在る所に從へばよい。例へば、仁齋の如くであればよい。仁齋の如くにして、初めて、眞理を闡明し、學者たるの任務を全くし得るのである。

□怪我するは元と眼の見えぬ故なれば
早く明かし本心の眼を

七の二　娘の兩肌脱

◇一方に、思ひ定めよ、濱千鳥。いづれの浦か、浪風のなき。「松平定信」

娘も最早十六七、脊丈けの伸びるにつけて、親たちも、心が急く、母親が娘を呼んで：

『方々から、お前を貰ひに來るけれど、帶に短し、襷に長し。「日本俚諺」

で、これぞと思ふ緣もなかつたが、この頃、二軒からいつて來た。これは、相談になりさうだ。一軒は金持ち、然し、男が醜い。今一軒は、人品も好し、先づは立派な男ぶりではあるが、身上が劣る。尤も、兩方共、眞面目な人で、これが何よりと思ふ。この上は、お前の了簡次第、何方へなり、嫁づけたい、お前は、何う思ふの？　何方が好いの？……これ、返事をおしよ……はゝあ、恥かしいのだね？　それぢや、斯うしやう。私が、今、背ろを向くから、金持ちの方へ行きたいのなら、右の肩をお脫ぎ、男の好いのが望みなら、左の肩をお脫ぎ、その間私は、此方を向いてるよ。』

稍やあつて、娘が、肌を脫いだ樣子に、母親が、

『いゝかね？……どれどれ。』と見てびつくり、娘は、すつぱりと、兩肌を脫いでゐた。晝は、金持ちの方へ、夜は、好男子の方へといふ、これが、娘の望みなのであらう。

×　×　×

この娘、恐らく、一生を犧牲で終るに相違ない。餘りに、心が多過ぎる。嫁入りの一事には限らない。心の多いのは、すべての場合に、宜しくない。「一方に、思ひ定めよ、濱千鳥。何れの浦か、浪風のなき。」——一方に思ひ定めることが必要で、それでなければ、何事も、成就はしない。學問の事、技藝の事、すべて、然りである。

七の三一　賢人の智

◇好んで、小慧を行ふ。「論語」

「暗き人の、人を量りて、其の智を知れり、と思はん、更に、當るべからず。」

「拙き人の、碁打つことばかりに、敏く、巧みなるは、賢き人の、此の藝に愚かなるを見て己れが智に及ばずと定め、萬づの道の巧、我が道を人の知らざるを見て、已れ、優れたりと思はんこと、大なる誤りなるべし。

文學の法師、暗證の禪師、互ひに量りて、已れに如かずと思へる、共に當らず已れが境界に非ざるものをば、爭ふべからず、是非すべからず。」

× × ×

他人の心持ちは解らない。他人の智と愚は解らない、一事に優れた者、萬事に優れてゐるわけではなく、一方に劣つた者、萬方に劣つてゐるわけではない、所謂、

商賣は、道によつて賢し。「日本俚諺」

である。已れの一技一藝を恃んで、他人のそれに不知案内なのを侮れば、却つて、恥ぢかゝされることもあらう。

況して、愚人を以て、賢人を量り、その、小事に通じないのを見て、輕蔑したくなるなどは、以ての外の曲事である。

小人には、大概、才がある。利巧である。その口は、以て、已れへ非を飾るに足り、鷺を烏といひ黒めるに足る。合壁の顧問、町會の口利き、一寸、三百代言の眞似もやる。議員の選擧などには、なくてはならない男、といつた風で、重寶がられる。世渡りに拔け目がない。交際も巧いおべつか上手の世辭澤山、こすく、金持ちなどにも取り入り、役人となれば、樂に、上官の畢丸を握つて、相當、羽振りを利かせる。これ等の藝當、馬鹿には出來るものではない。誰れであつたか、才を以て、人を取ること、最も難し。小人、多くは、才あるなり。